

【特別調査報告】西巖寺藏「小川貫式資料」

調査報告（二）

藤井由紀子

小川徳水

北村一仁

大艸啓洋

工藤克洋

高木祐紀

中川剛

新野暢剛

花和暢

日比野洋文

〔調査報告掲載にあたって〕

昨年度、調査報告の第一弾では、各務原市の西巣寺に藏された「小川貫式資料」⁽¹⁾のうち、日中戦争下における学術調査記録に着目し、分析を加えることで、それらを史料として新たに価値づけていく、その可能性について問題提起を試みた。小川貫式（以下、貫式と略称す）は龍谷大学に学び、後に同学で教鞭をとることになった中国仏教史学者であるが、貫式の自坊であった西巣寺に残された自筆原稿を中心とする資料のなかでも、昭和十四年（一九三九）、西本願寺の興亜留学生として日中戦争下の中国に渡った際の、三年間の記録類を特に重視して研究対象としたのである。

その理由は、次の二点にある。ひとつは、学史的な観点からの重要性である。というのも、国益を賭けて侵略が行われた近代戦争の場合、侵略先の歴史・文化・思想を把握することは、しばしば有効な戦略手段となりえたからである。たとえば、日中戦争時の中国山西省では、「宗教工作」⁽²⁾、あるいは「仏教工作」⁽³⁾の名のもと、古くから仏教聖地として知られた五台山が、日本陸軍によって復興されており、そこに多くの日本人研究者が動員され、貫式も含め、山内各所で調査活動に従事していたことがわかっている。しかしながら、実際に調査研究活動の現場はどのようなもので、その成果がどんな形で活かされたのか、そして、それが今日の研究にどうつながっているのかについては、残念ながら、あまり

留意されてきてはいない。戦争の是非に結びつけることを前提とした議論ではなく、近代以降の学問の発展の道程を正しく知るという視座から、戦時下の中国でどのように学術調査が行われたのか、その具体的な把握に努めるることは非常に重要なことではないか、と考える。

もうひとつは、「小川貫式資料」には、戦争下における複雑な共存関係が類推できる資料が含まれていることである。西本願寺の興亜留学生として貫式が中国に派遣されたことには、学術調査に従事させる目的のほかに、当時、日本の仏教界が進めていた中国開教、つまり、日本式の仏教を中国に根付かせようとする施策との関連もあったとみられる。中國開教問題については、来年度の調査報告のメインテーマとして取り上げる予定であるが、学術調査も、ともに宗教工作の一環として、軍部と連携して進められていたものではありながら、興亜留学生として中国で活動した貫式の残した資料を見る限り、学問や仏教の現場における人間同士のつながりは多様で、侵略する側・侵略される側といふ単純な構図では理解できない、複雑な共存関係のあったことが想定できるのである。奇しくも、昨年は日中國交正常化四十五周年、そして、今年は日中平和友好条約締結四十周年という年にあたっている。そうした点でも、両国にとって負の経験となつた日中戦争の、その戦時下に作成された調査記録に改めて着目し、こうした視座からの分析を進めることは、学史上の問題を超えて、大きな意義を持ちうるのではないか、と考える。

「小川貫式資料」自体、そうであったように、從来、戦前から戦後にかけて活動した研究者の残した遺稿類は、関心を持たれることなく廃棄あるいは、遺族等のもとに死蔵されるケースが多い。貫式の遺稿類の場合、日中戦争時に作成・蒐集された資料群を含むことから、当研究所で研究プロジェクトを立ち上げ、資料の分類整理を行うとともに、近代戦争と学問という歴史的文脈のなかにこれらを置いて捉え直すことによつて、史料的価値を改めて探る作業に着手することができたが、もちろん、その成果はいまだ未知数である。しかしながら、昨年の十二月、「戦時下的中国仏教研究—西巣寺藏「小川貫式資料」と山西省調査記録」と題した展覧会を開催したほか、昨年度の紀要に調査報告を掲載したことでの日本近代史、アジア史など、各方面の研究者の方々からのご教示を賜わつたことは、本当に幸甚の極みであった。特に、大谷光瑞に関するご研究で知られる、広島大学敦煌学プロジェクト研究センターの白須淨真氏からは、小笠原宣秀という中国仏教史学者の遺稿類の存在を示唆していただいたばかりか、その中核となる資料群を、遺族のご了承を得て一時貸与くださるという饒幸に恵まれた。⁽⁴⁾ 今回の報告では、この資料群を「小笠原宣秀資料」と仮称し、これらに基づいた小論を掲載しているが、「小笠原宣秀資料」は本研究プロジェクトにとって重要な比較材料となる貴重なものであり、「小川貫式資料」とともに、その史料性について深く掘り下げることができれば、今後はそれを第三、第四の遺稿類へと展開させて、新たな史料のプラットフォームを構築できるのではないか、

と考えている。白須氏のご慧眼、および、ご厚情に心よりお礼を申し上げたい。

本研究プロジェクトのメンバーについては、昨年度と同様、同朋大学佛教文化研究所の所員藤井のほか、客員所員・客員研究員の中川剛・高木祐紀・工藤克洋、西巣寺住職の小川徳水の五名が研究調査に携わつてゐる。さらに、今年度より、研究所から新たに新野和暢（客員研究員）、花栄（客員研究員）が加わり、さらに龍谷大学の北村一仁氏にもご協力を仰ぐこととなつた。メンバーのうち、日本近代史を専門とする者はわずかであるが、学史上の問題をテーマとすることもあり、各自がそれぞれその専門性を活かして調査研究活動に従事している。また、上記メンバーの工藤・中川を含め、昨年度発足した研究所の「情報公開プロジェクトチーム」から、大艸啓（所員）、日比野洋文（特別研究員）も本調査に加わり、研究所のリソースが限られるなか、これらをどのような形でデジタル化すべきか、データベース構築の観点から、写真撮影等の作業に腐心するなど、今後の調査成果の発信を念頭に、より多岐的な調査研究体制が整つてきていることも、ここでは特筆しておきたい。

最後に、今回の報告の構成について触れておくと、「小川貫式資料」のうち、龍谷大学アジア仏教文化研究センターの佐藤智水氏に一時寄託された拓本類の分析を、同センターの北村氏に依頼したほか、広島大学の白須氏から貸与を受けた「小笠原宣秀資料」の紹介・分析を、藤井と小川とで担当した。西巣寺藏の「小川貫式資料」の調査もひきつづき行

われているが⁽⁶⁾、その調査が完了する来年度、統轄的報告を掲載する予定であるため、大学間を超えて研究者の交流が始まつたことを活かすという意味で、今年度はこのような報告内容とする 것을選択した。本報告の内容について、昨年度と同様、力不足をご叱責くださるとともに、各方面からあたたかきご教示をいただけることを、心から望む次第である。

註

- (1) 西厳寺には貫式が残した、日中戦争時以外の資料も大量に蔵されている。今後、これらをどう整理していくかは課題であるが、厳密にはこれらを含めて「小川貫式資料」と呼ぶべきである。
- (2) 道端良秀「支那仏教調査報告概要」(『真宗』第五〇二号、昭和十八年六月)。この記によると、道端は山西省と山東省で軍の依嘱により文化史蹟調査に従事したといい、「文化工作宗教工作の上に、多少の貢献をなすことが出来た」と記している。ただし、これはほんの一例で、『中外日報』をはじめ、日中戦争下の記事には「宗教工作」という言葉が多々登場する。
- (3) 三上諦聴「五台山紀行」(『支那佛教史学』第四卷第三号、昭和十五年十一月)。このなかで三上は、五台山入りする途中、崞県城内の陸軍特務機関司令部に挨拶に行き、そこで五台山の現状と「佛教工作の高見」を聞いたと記している。
- (4) 龍谷大学教授であった小笠原宣秀は、白須淨眞氏の恩師という関係にある。
- (5) 大艸啓・工藤克洋・中川剛・日比野洋文・藤井由紀子「情報公開プロジェクトについて」(『同朋大学仏教文化研究所報』第三十号、平成二十九年三月)。
- (6) 二〇一七年度第一回調査・平成二十九年四月十九日実施(西嚴寺)。

第二回調査・平成二十九年六月三日実施(西嚴寺)。第三回調査・平成二十九年十一月二十九日実施(龍谷大学)。第四回調査・平成二十九年十二月二十八日実施(同朋大学仏教文化研究所にて「小笠原宣秀資料」の基礎調査)。

山西省玄中寺の復興と「小笠原宣秀資料」について —「小川貫式資料」の史料性をめぐつて

藤井由紀子
小川徳水

はじめに

政治経済史であっても、文化思想史であっても、史料に基づいて考察を進める、それが歴史学の基本である。ところが、考察の基礎となる史料は、現実には決して豊富に残されているわけではない。いかに新しい史料を発見し、いかに既存の史料を読み換えていくか。歴史学にとっては、それがつねに大きな課題となる。

この調査報告では、こうした課題に対しても、日中戦争下における研究者の遺稿類に着目し、それらを史料として価値づけることで、ひとつのチャレンジを試みている。きっかけは、一昨年の、各務原市西厳寺にお

ける「小川貫式資料」の発見にある。小川貫式（以下、貫式と略称す）は西厳寺住職をつとめるかたわら、龍谷大学で教鞭をとった中国仏教史学者であるが、大藏經の研究者として知られる貫式の所蔵經典を拝見するため、西嚴寺を訪問した際、思いもかけず目にとまつたのが、貫式がまだ大学院を出たばかりの頃、西本願寺の興亞留学生として戦時下の中国に渡った時の記録であった。最初に手にしたのは、山西省の省都、太原にある崇善寺の調査日誌で、赤で「陸軍」とはっきり印字された便箋に、インク書きで調査の経緯がびっしりと書きつけられており、近代以降、仏教史研究がどのようなプロセスを経て今日に至ったのか、その一齣にこのような形で触れたことに衝撃を受けたのである。

その後、貫式の所蔵する經典類とは分けて、貫式の遺稿を中心とする資料群を「小川貫式資料」と呼称したうえで調査に着手し、「戦時下の中国仏教研究—西巣寺藏「小川貫式資料」と山西省調査記録」と題した展覧会を研究所にて開催したほか、昨年度の研究所紀要に調査報告を掲載し、この資料群の史料的価値について問題提起を試みた^①。意外にもその反響は小さくなく、日本近代史の研究者の方々はむろん、中国、朝鮮、モンゴル、そしてチベットも含めた東洋史の研究者の方々から貴重なご教示を賜わった。特に、広島大学の敦煌学プロジェクト研究センターの白須淨真氏^②から、龍谷大学の教授であり、貫式とほぼ同時期^③、中国の地にあった、小笠原宣秀（以下、小笠原と略す）^④という中国仏教史学者の残した遺稿類について情報提供を受けたことは、今後の調査研究を左右する、画期的な出来事であった。ちなみに、これらの遺稿類は、小笠原の実家である島根県の西福寺に蔵されていたもので、白須氏の特別のご配慮のもと、西福寺のご住持でいらっしゃるご子息の了解を得て、現在、同朋大学仏教文化研究所に一時的に貸与されている^⑤。そこで、研究所では、これらを仮に「小笠原宣秀資料」と呼称し、「小川貫式資料」と並行して、その調査研究に着手することにし、その作業過程で得られた知見に基づいて、それを論文にまとめることにしたのである。

研究者もまた、時代に規定された歴史的な存在にすぎない。その意味では、近代戦争と近代学問との関係について、戦争の是非に性急に結びつけてしまうことよりも、「小川貫式資料」や「小笠原宣秀資料」のよ

うな“生の記録”に基づいて、当時の状況をできうるかぎり具体的に洗い出していくことのほうが、はるかに重要なのではないかと思う。そうでなければ、近代学問の客觀性・實証性の質そのものを問い合わせ直し、ひいては、新しい研究方法の構築につなげていく、その可能性も絶たれてしまふからである。本論では、このような考え方のもと、「小笠原宣秀資料」を通して、玄中寺の復興^⑥という、日中戦争下における中国山西省での動向を追いかけながら、「小川貫式資料」も併せて、戦時下に中国仏教史学者が残した記録類の史料的価値について、改めて考察してみたい。

一 「小笠原宣秀資料」の概要

—山西省玄中寺復興の観点から

昨年度より調査を開始した西巣寺藏の「小川貫式資料」には、大判カラー刷りの一枚のポスターが含まれている。一枚は、五台山のシンボル、白塔寺をバックに、モンゴル風の衣装をつけた人物が描かれたもので、上部に「五台山六月大廟会」と大きく印刷されている。残念ながら、開催年は印刷されていないものの、「陰曆六月一日（陽曆六月二十五日）・起／陰曆六月三十日（陽曆七月二十四日）・止」とあり、八路軍（中国共産軍）の五台山占拠以後、六月大会という五台山最大の宗教行事が中断されていた、それを昭和十五年（一九四〇）六月、日本陸軍が復興した際に作成されたものだと考えられる^⑥。

そして、もう一枚は、黒い作務衣風のものを着した人物が、大きな黄色い円光を背に、真正面を向いて合掌する姿を描いたもので、上部には「石壁山玄中寺奉讃会 疊鸞大師壱阡四百周大法会」とあるほか、下部には「自十月四日至十月十日／八月廿五日／九月廿日」とある（図1）。昭和十七年（一九四二）、日中両国の仏教界が合同で玄中寺奉讃会を組織し、山西省交城県にある玄中寺において、疊鸞という僧侶の千四百年忌法要を行ったことは、『中外日報』など、当時の新聞記事からも確かであり、このポスターもまた、その法要開催時に作成されたものだと類推できた。

しかしながら、六月大会の期間中、貫式は五台山には足を運んでいるものの⁽¹⁾、昭和十七年三月、中国から帰国しており、玄中寺の疊鸞千四百年忌には参加していない。また、当ポスターと絵葉書一セットを除いては、「小川貫式資料」のなかに玄中寺関係のものは特に含まれず、疊鸞の年忌法要以前にも貫式が調査で玄中寺を訪れるることはなかつただろうとみられ、この一枚のポスターが意味するところについては、あまり深く留意することはしなかったのである。

ところが、昨年七月、白須淨真氏より送られてきた一冊のアルバムが、一転して玄中寺に着眼する、その契機となつた。というのも、これは昭和十七年、小笠原が中国を視察した際の写真を貼付したアルバムで、中表紙裏には「昭和十七年九月より同年十二月にかけ支那視察旅行をなす（玄中寺法要参列が主目的なり）」と墨書きされていたからである。しかも、

太原、開封、南京など、中国各所の写真がきちんと貼りこまれたなかの、ほんの数枚ではあるが、常磐大定（以下、常磐と略称す）や小笠原自身の姿とともに、玄中寺で行われた疊鸞の年忌法要に関する写真がアルバムにはあり、五台山の六月大会と同様、日本の多くの仏教系研究者たちの学識を集め、中国浄土教の発祥地としてここを復興することでの、当時、日本が掲げた「東亜新秩序」の実現を象徴する舞台のひとつとして玄中寺が位置づけられていった、そうした経緯が想像できたのである。まさに点から線へ、この「小笠原宣秀資料」からは、「小川貫式資料」の分析過程で示唆された、学術調査と中国開教との両輪として、戦時下で真摯に活動した研究者の姿と通底するものが見えてきたのである。

そこで、本章では、「小笠原宣秀資料」の内容に基づいて、玄中寺復興の経緯とその背景について、まずは確認してみたい。さいわい、昨年十二月には、同じく白須氏より、小笠原の自筆原稿を含む、玄中寺復興に関わる資料、約四十点を送つていただくという、さらなる饒幸に恵まれた⁽²⁾。それらは、自筆資料、写真資料⁽³⁾のほか、小笠原に関連する記事が掲載された新聞・雑誌類⁽⁴⁾と、大きく三つに大別できるが（表1）、その大半が玄中寺復興に関する内容を含むものであり、考察の端緒とするには恰好の資料となるからである。

さて、「小笠原宣秀資料」のうち、最初に取り上げたいのは、写真三百四十一点を貼り付けたアルバムである（図2～5）。すでに触れたように、中表紙の見返し部分に「昭和十七年九月より同年／十二月にかけ

支那視察旅行／をなす（玄中寺法要参列が主目的なり）」と記されてい
るほか、第一頁から第三頁にかけて貼付された写真には、玄中寺での曇
鸞千四百年忌法要の当日と思われる、興味深い様子も写っている。ちな
みに、これらの写真に添えられたキャプションを拾ってみると、第一頁
表には「石壁玄中寺参拝」「玄中寺裏山を望む」「元鐘と元碑の傍にて」
「玄中寺法要を終へて」、第一頁裏には「^(ラ)玄忠寺参道入口」「^(ラ)玄忠寺門」、
第二頁表には「^(ラ)玄忠寺門遠望」「雨中参拝の道にて／俄作りの輿に乗れ
るは常磐博士／接待員の傘に入れるは小笠原なり」、第二頁裏には「交
城市街」「玄中寺庭にて」、第三頁表には「汾河を渡る」「常磐博士」「交
城宿舎にて」「離相寺塔」とあって、玄中寺の風景とともに、記念法要
のため、この玄中寺を訪れた、常磐や小笠原の姿が認められる。⁽¹²⁾ 周知の
ごとく、常磐は大正九年（一九一〇）に玄中寺を発見したそもそもの立
役者である。厳密には、法要時の様子を撮影した写真は含まれていない
が、輿に揺られて玄中寺へと向かう常磐の姿がここに写しだされている
ことは、近代仏教史の一齣としては大変に興味深いものがある。ちなみに
、玄中寺以降のページには、太原、臨汾、趙城（広勝寺）、解県、虞
鄉（石仏寺）、蒲州、塩池神廟、獲鹿（本願寺）、正定、天津、濟南、曲
阜、徐州、上海、蘇州、杭州、開封、南京といった地域の小判写真が貼
付されている。中表紙裏に「支那視察旅行」と記されてあつたように、
これらは玄中寺と太原での法要を終えて、小笠原が視察に向かった、そ
の先々で撮影したものであつた、と推定できる。⁽¹³⁾

次に、小笠原の自筆資料について紹介したい。自筆資料は全部で三点
である。「玄中寺奉讚法要参列並ニ現地布教調査報告」（全五枚）、「盛大
に勤まつた玄中寺法要」（全二枚）、そして、「曇鸞撰述」「道綽撰述」
「善導撰述」と各紙冒頭に題された古文献の一覧（全四枚）がそれで、
いずれも玄中寺に関するものであることは明らかである。ただし、どれ
も小さく折り畳まれた状況で現存していて、かつ、綴じられてはいない
ことから推すと、これらはおそらく下書き的なものであつたのではない
か、と思われる。

玄中寺奉讚法要参列並ニ現地布教調査報告

出張受命者 龍谷大学予科教授 小笠原宣秀

一、出張趣意

昭和十七年ハ支那淨土教ノ大家ニシテ真宗ニテハ七高僧ノ隨一二數
ヘラル所ノ曇鸞大師千四百年忌ニ當ル 予テ華北ニ於テ組織サレタ
ル石壁山玄中寺奉讚会ハ曇鸞大師ノ高徳ヲ偲ビソノ遺蹟タル玄中寺
ヲ復興シ昔乍ラノ念佛ノ道場タラシムルコトニヨリ精神的文化的ナ
ル日華ノ融合親善ヲ計リ東亜新秩序建設ニ資セントスルモノナルガ
同会ノ主催ノ下二十月四日ヨリ十日ニ至ル一週間太原市並ニ石壁山
ニ於テ曇鸞大師年忌法要並ニ日華陣没者慰靈法要ヲ營マルコトト
ナレリ、而シテ同会ニテハ如上意図ノ実現ヲ高次のモノタラシメ
ントシ日本内地ノ淨土各宗派ノ代表者ノ参列ヲ要請シ来レリ 本派

本願寺ハソノ代表者トシテ不肖ヲ選定サレタリ依テ若輩ヲ省ズ右法要ニ参列スルコトトナレリ、シカモ不肖本願寺興亞部ヨリハソノ使命ニ加フルモ現地布教調査ノ事ヲ嘱セラレタレバ右法要参列以後ノ期間ヲ北支中支ノ諸地ヲ巡回シテ諸種調査ヲ行フコトトナレリ、翻テ思フニ不肖龍谷大学ニアリテ支那仏教史学ヲ担当考究スルモノ予テ支那ニ於ル仏教史蹟ノ実地踏査ヲ希求シツツアリ、此度ノ渡航ヲ好機トシテ、イササカソノ方面ニオキテモ所得アラシメントシ出張ヲ受諾シ雀躍トシテ發足セルモノナリ

これが自筆資料のうち、「玄中寺奉讚法要参列並ニ現地布教調査報告」と題された資料の、一枚目の全文である（図6-7）。当時、龍谷大学予科の教授職にあった小笠原が、西本願寺興亞部からの命を受け、出張という形で玄中寺法会に参加していたことがわかる。また、玄中寺で行われた曇鸞四百年忌法要に関するいくつかの内容も、簡潔に記されている。すなわち、曇鸞を七高僧の一人とする淨土真宗では、中国淨土教の大家として曇鸞に特別の尊崇を寄せていたこと、中国華北において玄中寺奉贊会が組織されたこと、昭和十七年（一九四二）十月四日から十日にかけて、曇鸞の千四百年忌を記念した法要が太原と玄中寺で行われたこと、曇鸞年忌法要と合わせて日華事変戦没者の慰靈法要も行われたこと、曇鸞の聖跡として玄中寺を念佛道場とすることで日中の融合親善を図り、ひいては、それが日本の掲げた「東亞新秩序」の建設にも寄与

すると考えられていていたことが明確に知られる。さらに、小笠原個人の動向に関係することとしては、西本願寺興亞部から派遣されたという事情を投影して、法要終了後、現地布教の状況を視察する予定であること、仏教史研究者という立場から、兼ねて中国の仏教史跡の実地踏査も行う予定であることなどが記されている。

なお、この調査報告の二枚目以降には、北京、天津、太原、石門、濟南、開封、青島、通州、定県、陽泉、順德、運城、帰德、棗莊、柳泉、豐台といった地名が列挙され¹⁴、たとえば、

北京

大谷派別院 知恩院別院 妙心寺別院

曹洞宗別院觀音寺 高野山別院金剛寺

身延山別院法華寺 久遠山本仏寺 天台宗出張所

天津

大谷派別院 同河北出張所 知恩院別院天津寺

妙心寺布教所 曹洞宗別院觀音寺

真言宗金剛寺 同大師寺 日蓮宗妙法寺

太原

大谷派布教所 知恩院別院 妙心寺布教所

真言宗太原寺 日蓮宗太晶寺

（後略）

というように、各地域の各宗派の出張所もあわせて示されている。調査報告とはいながら、これはおそらく渡中前に記されたものであり、法要後は中国各地の布教状況を調査する予定だと小笠原が一枚目で述べていた、その文言から推せば、これらは準備のためのリストだった可能性が高い。ただし、アルバムの内容とつきあわせると、重なるのは太原、天津、濟南、徐州ぐらいであるから、小笠原がリストアップした場所に、実際に足を運ぼうと考えていたかどうかについてまでは、不明だとしなければならない。

さて、もうひとつ、小笠原の自筆資料には、「盛大に勤まつた玄中寺法要」と題された、曇鸞の千四百年忌法要の様子を伝えたものがある（図8～9）。その全文を紹介すると、

盛大に勤まつた玄中寺法要

予て北支玄中寺奉讚会によつて計画されてゐた所の曇鸞大師千四百

年忌を記念としてはじまつた玄中寺法要是十月四日より同十日に至る一週間に亘つて太原市並に石壁山玄中寺に於て盛大に執行された。

先づ十月四日は太原市崇善寺に於て西本願寺北支開教總長津村雅量師導師となつて、大東亞戦争戦没者追弔法会並に曇鸞大師千四百年忌法会が執行され、日華僧侶學授が参列した十月六日には石壁山に程近き交城県の弥陀寺に於て日華僧俗の玄中寺奉讚大会が催され常盤大定博士等の講話があつた。翌七日は生憎の雨天にて石壁山参拝

には一同難渋したが併し総勢二百名に垂んとする僧俗の大衆は雨にも憚せず曇鸞大師の徳を偲びつゝ登山した。而て東本願寺代表常盤大定博士導師となり日華戦没者慰靈法会並に玄中寺奉讚曇鸞大師年忌法会が型の如く営まれた。十月八日より十日まで太原市新民教育館に於て曇鸞道綽善導三師の事蹟顕彰並に日本佛教紹介等を含めた佛教展覽会が催され、来觀者が多かつた。

また九月及び十日の夜間には太原日華俱樂部講堂にて講演会が開催され、龍谷大学の小笠原宣秀、大谷大学の道端良秀両教授、大谷特派布教使の菅原惠慶師、深奥九十九師又は日蓮宗の原田晶堂師等が出講した。なほ十日午後三時より行はれた関係者座談会には軍部、翼賛会、佛教後援会等の有力者が参加して、玄中寺復興を中心講題として懇談を重ね非常に有益であつた。詳細についてはいづれ奉讚会より報道がある筈である。

とあって、昭和十七年（一九四二）十月四日から約一週間をかけて行われた、曇鸞年忌法要の具体的な内容を知ることができる。すなわち、法要是太原崇善寺、交城県弥陀寺、石壁山玄中寺の三箇所で行われたこと、そのうち崇善寺では本願寺派の北支開教總長の津村が導師をつとめたこと、これに対して弥陀寺と玄中寺では常磐が大谷派を代表して導師をつとめ、かつ、講演を行つたこと、また、最後の二日間には、太原の新民教育館で日本佛教の紹介を兼ねた仏教史跡の展覽会が、太原日華俱樂部

では小笠原をはじめ、大谷大学の道端良秀や、布教使の菅原惠慶、深奥九十九、さらには日蓮宗の原田晶堂による講演会が開かれたことなどがわかる。このように、十日までのわずか一週間足らずの間に、数々の行事が盛りだくさん詰め込まれ、当時、日本仏教界が非常に力を入れていた、中国開教の一大イベントとしても、この曇鸞千四百年忌法要が意味づけられていた様子を見てとれるのである。

以上が、「小笠原宣秀資料」のうち、特に注目すべき資料の内容である。ただし、次章でも紹介するように、玄中寺復興については、『中外日報』や『本願寺新報』をはじめ、『支那仏教史学』など、当時の新聞や学術雑誌にも頻繁に報じられていて、ここに記された内容は、決して目新しい事柄を含むものではない。しかし、西本願寺の興亞部から派遣され、中国開教と学術調査の交錯するところに小笠原の玄中寺参詣があつた、言い換えるなら、小笠原という人物の、本願寺派僧侶としての面と、中国仏教史学者としての面とが入れ子状になりながら、彼の中国といふ地への興味を支えていた、そのことをリアルに伝える資料という意味で、小笠原の直筆になるこれらの資料や写真は非常に重要なのである。

二　日中戦争下の玄中寺復興をめぐる動向について

前章では、「小笠原宣秀資料」のうち、アルバムと自筆資料の内容に

基づいて、山西省の太原と玄中寺で行われた曇鸞千四百年忌法要の大略

について紹介した。曇鸞は千四百年前、北魏時代に活躍した僧で⁽¹⁷⁾、中国での歴史的評価はさほど高くなく、むしろ忘れられた存在だったと言つていい。その聖跡だという玄中寺も、元時代以降は永寧寺と呼ばれ、禪寺となつていたほどである。⁽¹⁸⁾ところが、日中戦争勃発後、「宗教工作」⁽¹⁹⁾としばしば表現され、いわゆる宣撫工作の一環として進められた中国開教が遅々として進まない、そうした状況の打開策として、日本浄土教との関わりにおいて曇鸞の再評価を中国で促した結果、曇鸞ゆかりの玄中寺という場がにわかに復興ムードに包まれたのである。そして、その中にはおそらく、玄中寺の発見者であり、当代きっての仏教学者である心にはおそらく、玄中寺の発見者であり、当代きっての仏教学者であると同時に、大谷派僧侶でもある常盤大定の存在があったと思われる。

それでは、常磐による再発見から、曇鸞の年忌法要開催に至るまであいだ、玄中寺はどのように復興されていったのだろうか。この点を明らかにするため、本稿では、『中外日報』や『本願寺新報』といった新聞資料、『支那仏教史学』『日華仏教研究会年報』『龍谷学報』『大谷学報』といった学術雑誌、さらには、道端良秀や菅原惠慶など、玄中寺を実際に訪れた人たちの著作などを博搜し、その動向をできうるかぎり把握した。ただし、紙幅の関係もあり、それらをひとつひとつ挙げてここで紹介することはできない。詳しくは末尾の年表を参照していただきたいが（表2）、本章ではそれらのうち、特に注目すべき二つの事柄に絞り、玄中寺の復興について考察を重ねてみようと思う。

大正九年（一九二〇）九月の常磐による再発見以来⁽²⁰⁾、玄中寺は僧侶や

研究者たちの参詣を少しずつ集めるようになる。⁽²¹⁾ たとえば、昭和五年（一九三〇）五月、善導千二百五十年遠忌を機に、知恩院の門主らと共に、塚本善隆（以下、塚本と略す）がいちはやく玄中寺に参詣しているし、昭和十七年（一九四二）七月、ふたたびここを訪れた塚本に、大谷大学教授の道端良秀（以下、道端と略す）が同行している。

ちなみに、この道端は最も多く玄中寺を訪れた研究者の一人で、玄中寺関係の論考や調査報告が少なからずあるほか、昭和十七年十月、玄中寺復興の象徴として挙行された曇鸞千四百年忌法要の際、奉賛会が記念品として絵はがきとともに、「石壁山玄中寺略史」という冊子を配布した、その執筆を担当した人物である。⁽²²⁾ また、翌年五月一日、龍谷大学で行われた第三回支那仏教史学大会においても、道端が将来した玄中寺の拓本類が展観に供されている。なお、道端自身の記載するところによれば、大東亜共栄圏建設の文化部門に資するという考え方から、「玄中寺復興調査」なる研究題目によって東本願寺から一年半の中国留学を認められたといい、特に北支、すなわち、山東省と山西省を中心に、軍団として調査研究を行ったらしい。そして、その期間中は北京本願寺、濟南本願寺（山東省）、太原本願寺（山西省）を拠点として調査を続け、玄中寺の場合は交城県に根拠を置いて、三度の調査を行ったという。⁽²³⁾ たとえば、昨年度、「小川貫式資料」の調査報告のなかで、史料紹介として掲載した、太原崇善寺における貫式の大藏經調査記録にも、道端のことがしばしば見えており、⁽²⁴⁾ 太原本願寺を山西省調査のキーステーションとして、東西

の別なく、両本願寺から派遣された研究者たちが学術交流を行っていたことがうかがえるのは、非常に興味深い。

このように、中国開教という宗教工作の一環として、軍の支援のもと、玄中寺の調査が次第に本格化するなか、こうした動向を準備した、その画期として大きく注目されるのが、昭和十六年（一九四一）の興亞院宗教史蹟調査団による玄中寺訪問である。すなわち、『本願寺新報』第九二六号の「浄土門発祥地を調査／荒廃せる玄中寺／世界的の石仏や石経も発見」という記事によると、

世界の美術家をして東洋の一大美術館とまで讃嘆せしめてゐる支那大同石仏にも比すべき大規模な石仏および石経が、わが興亞院宗教史蹟調査団、三上諦聴（本派北京駐在）吉井芳純（真言宗）松井聰順、藤谷道威（本派太原駐在）等四氏一行によつてこのほど発見され仏教文化史、東洋文化史上に一大収穫をもたらした（中略）玄中寺の現状につき調査団一行は帰任の上当局に報告するとともに日本の浄土教関係の諸方面に呼びかけて復興に關する協議をした上立案を急いでゐるやうであるが先づ石壁山玄中寺の復興委員会を結成し、石壁山までの自動車専用道路を新設すること、石壁山一帯を玄中寺の山とし植林をすること、寺院の復興とともに曇鸞、道綽、善導三大師の大きな追弔法要を厳修すること、浄土門の支那高僧並に日本の権威者を玄中寺に招聘することなどの問題につき研究をつゞ

けてゐるが、目下入洛中の北支布教総監芝原玄超氏もこの復興問題には大いに乘氣になつてゐる。⁽²⁶⁾

とあり、三上諦聴（以下、三上と略す）、吉井芳純、松井聰順、藤谷道威⁽²⁷⁾

らが玄中寺で調査を行つたこと、調査の成果を興亞院に報告したところ、

玄中寺復興に關して具体的に協議する機會が持たれたこと、そして、それが日本の淨土教関係者による玄中寺復興委員会の結成へという動向につながつていったこと、さらには、芝原玄超⁽²⁸⁾という本願寺派の北支布教

総監の強い後押しのあつたこともわかる。この調査団は玄中寺だけに限らず、各地で仏教史跡の調査を行つてゐたようであるが、興亞院という言葉が冠せられていることから推しても、各地で調査を行い、その成果の中から、大東亜共栄圏建設のための舞台となりうる場所に白羽の矢を立て、復興に結びつける、ということが行われていたのだろう。おそらく、玄中寺はその最たる例であつたとみられる。特に、この玄中寺の場合、山西省太原郊外という立地も関係するのか、昭和十五年（一九四〇）六月、五台山で大々的に行われた復興六月大会の成功がかなり意識されていたようである。たとえば、『中外日報』第一二七一七号には、「暁鸞大師千四百年の法要を／全支那の大祭運動に／北支の玄中寺復興計画」として、

の千四百年の大法要を五月七日この玄中寺で挙行することとなつて居るが、これを山西省運城の閔帝廟の大祭や五台山の六月大会などといふ支那中での大祭に呼応して支那全土から参拝させようといふ大きな方針によりよびかけることとなつた。⁽²⁹⁾

とあり、実際には十月に行われた暁鸞年忌法要ではあつたが、五台山の六月大会の時期に連動させるという構想のもと、開催日程を当初は五月と決めていたこともわかる。

なお、興亞院支那史蹟調査団の團員の一人である三上は、「大陸に建設すべき仏教文化を問う」と題して、中国における宗教工作の必要性を説いていた人物である。⁽³⁰⁾ 事実、昭和十七年（一九四二）玄中寺で暁鸞法要が行われるようになるまでの経緯を、『中外日報』等の記事で追いかけていくと、西本願寺の興亞留学生として渡中した三上が、復興運動の中心であつたことを伝える記事が頻出している。特に、昭和十六年（一九四一）八月に一時帰国した彼が、淨土宗、本願寺派、大谷派という、日本側の淨土系三宗派の要人たちに玄中寺復興を訴え、翌年三月二十七日に各派代表により結成された「東西淨土合同調査團」の玄中寺参詣を実現させたことは、復興に向けて、大きな機会を準備したと言わなければならぬ。

さて、淨土系三宗派の協力体制を固めるという、こうした三上の、いわば政治的な動きに対し、高原一道（以下、高原と略称す）と藤谷道威

が展開した念佛運動は、これとは対照的な感を受けるもので、中国現地での念佛実践を奨励し、その運動の高まりを玄中寺復興の気運に結びつけようとしていたようである。すなわち、『本願寺新報』第九三四号「念佛に蘇へる／北支山西省／高原一道」という記事によると、

廬山の慧遠を産み、曇鸞大師を産むだ山西省は砲煙彈雨の中から、

今や念佛により誕生しやうとしてゐる。

太原市の南、交城の西北約三里の峡谷を行くと、淨土教徒の夢寐にも忘るゝことの出来ぬ石壁山玄中寺がある。曇鸞、道綽、善導の三高祖が留錫して念佛を弘通せられた靈場である、随つて山西省に念佛門が弘通する素地があることは言を俟たぬ

民国九年、代県（山西省北部）から忽然と太原市に來た僧昌修が、開化寺に足を留めて坐禅念佛に余念が無かつた、その木魚を聴き高風を慕つて集つた人々の中には趙戴文（閻錫山の顧問で皇軍側の任命した山西省長）力宏、梁碩光、許振江その他廿數名の僧侶がある一年後には千数百名の会員が出來民国十五年頃には会員一万三千名という激増振りを示し、中山公園〔今的新民公園〕の北に土地を購ひ太原仏教会館を新築するに至つた。今の東本願寺がそれである、僅々五年にして太原市人口の約一割の会員を獲得したといふとは、昌修法師の高徳もさることながら、民衆に念佛の素地があるからである、朝夕二回の功嘉の朝の集ひに心を洗除して職場に赴き、夕に

は感謝の集を為した念佛会員は實に恵まれ人々であつた、昌修法師は民国二十五年に円寂せられたが、その弟子及び居士達によつて、この念佛会は指導されてゐた、民国十八年の大法難、寺廟を破壊し、仏像を破壊するの暴状も約二箇月後には終息し、太原市の念佛会は継続することが出来たが、今次事変勃発と共に中止の止むなきに至つた

然るに山西省内の治安恢復の目覚ましい進捗と共に念佛会復興の声は太原市をはじめ省内各地に滂湃として起り、趙城県興唐寺の妙舫老法師、同県広勝寺の力空法師太原市崇善寺副住職明嚴法師、許振江居士其他僧俗の熱心なる努力によつて、戰禍に喘ぐ民衆も今や念佛により希望と光明を与へられんとしてゐる

皇軍側も山西省陸軍特務機関長横山大佐は熱心なる念佛の支持者であり、鉱山側は大倉鉱業理事長太田文雄氏は二万五千の坑夫の精神の支柱として寺院建立を計画してゐられ、管路局長遠藤貝一郎氏も愛護村運動には寺廟の復興と念佛会の結成が最も要緊であるとしてこれが為に努力をしてゐられる新民会もこれに熱心協力の龍大出身河南、河野、■■氏等の活躍は目さましい西本願寺、東本願寺、淨土宗その他の各宗も熱心に協力して而して本年六月八日には日華軍官民の発起により山西省中國佛教後援会が盛大なる發会式を挙ぐ中國佛教を興隆する経済的基礎を確立することになつた、東亞共榮園の地下資源は山西省に在るが、精神的資源の念佛も山西省から湧き

出で、中国を救ひ、東亞を明朗化せしむることも決して夢ではないのである。⁽³⁵⁾

とあり、かなり長文の引用となつたが、これを要するに、玄中寺の御膝元ゆえ、山西省の中國民衆には念佛信仰の素地がある、というのが高原の言い分である。中華民国九年（一九二〇）、奇しくもこれは常盤が玄中寺を再発見した年であるが、代県から太原に来た昌修という僧が開化寺に留錫して坐禅念佛を始めたところ、その高風を慕つて人が集まり、わずか五年足らずの間に念佛に帰依する者が太原人口の約一割にまで及んだということを紹介しつつ、その拠点となつた太原仏教会館が東本願寺の前身であること、日華事変の勃発で念佛会が中止になつたこと、しかししながら、もともと念佛の素地のある土地柄だけに、戦禍のなかそれが再び息を吹き返していることが丹念に述べられている。そして、特務機関や新民会、山西省管路局など、日本の関係者の念佛信仰が、そこにさらに加わるという太原での現況を顧みて、念佛を介した日中のつながりこそは大東亞共榮圏の基礎を形成するものだと、高原は主張するのである。もちろん、これは『本願寺新報』という、本願寺派の新聞に寄稿されたものであり、多分に宣揚的な論調であることは否めないが、高原については、他にも『中外日報』第一二七六二号に、「山西の共匪蠢く地に／驚くべき支那念佛復興／玄中寺中心に涌き上る／高原、藤谷氏らの大計画」と題された記事があり、

北支山西省の支那淨土教の遺跡として広く知られた玄中寺を中心には宗教復興運動が広く同地に展開されんとして注目されてゐる。（中略）念佛運動が溢れるやうにモリ上つて居ることが各方面から注目されて來たのである、その名称は山西省佛教總会といふのだが事実は支那淨土教の根元地に因んだ「念佛運動」と俗称され何といつても支那民衆の精神生活の中心をツカンで居る道教の居士たちをさへ「仙經」を焚くといったほどの勢力が現れて居り西本願寺から五台山に派遣されて居る高原一道、藤谷道威の二氏が隠れたる指導者とする運動であることが明かにされた（後略）⁽³⁶⁾

というよう、太原の地では実際に念佛運動が高まりをみせていてことは事実であり、それは西本願寺から中国開教のために当地に派遣されたいた、高原たちの指導に負うところが大きかったのである。

以上、新聞記事の内容を整理していくと、玄中寺の発見を契機として、三上のような、日本の淨土系三宗派の有力者たちに働きかけ、協力体制を築くという上からの動きと、高原のよう、中国現地における念佛運動の実践を重視した下からの動きとが、それぞれ活発になつていき、この二つが重なりあうところに玄中寺の復興が成し遂げられていったことがわかる。失われた中国の淨土教を蘇らせる。三上にせよ、高原にせよ、これを日中双方に共通する目標として掲げることで両国の佛教界を結び、ひいては日本を中心とした大東亞共榮圏の実現につなげるべく、着々と

復興の準備を進めていったのである。⁽³⁷⁾

三 常磐大定と玄中寺復興

常磐大定といえば、日本仏教の源流としての中国仏教史跡を数々踏査し、建築学者の関野貞とともに、その成果を『支那仏教史蹟』として刊行したことで著名な大学者である。⁽³⁸⁾ その常磐が、自身の著作、『支那仏蹟踏査 古賢の旅』玄中寺章の冒頭で、大正九年（一九二〇）の玄中寺発見について、次のように述べている。

石壁山は、我が曇鸞大師の退隱修道せられし聖地である。当時は玄中寺と呼ばれたが、元の時代に律を改めて禪とし、その名をも永寧寺と改めた。予が支那行の目的の三分の一は、実にこの永寧寺に詣せんとするにあつた。曇鸞大師は、北魏晩年の人であるが、下りて唐代の道綽禪師は、大師の碑文を見て入信し、時代を隔て、大師の弟子となり、此寺にも住したのである。我が開山親鸞^(マヤ)上人の鸞は、實に曇鸞の鸞を承けたもの、又壯年の時の名であつた綽空の綽は、乃道綽の綽であつた。それ程に親鸞^(マヤ)上人は曇鸞・道綽の二祖に私淑せられた。この永寧寺は、二祖所住の聖地なのである。我が巡礼行の目的の大部がこゝにあるは、この理由による。⁽³⁹⁾

このように、曇鸞と道綽という、親鸞にゆかり深い高僧の跡を訪ねることこそが、常磐の中国踏査の目的だったというのだから、彼にとつては、大谷派僧侶として曇鸞に向ける憧憬のほうが、研究者としての立場以上に大きいものであったのかもしれない。果たして、発見から二十二年後、玄中寺で行われることになった曇鸞千四百年忌法要において、常磐は導師をつとめ、講演を行うなど、この宗教行事を盛り上げるのに大きな役割を担つた。しかも、七十四歳という高齢をおして、曇鸞の年忌法要のために渡中し、いまだ参詣路の整備も行き届かない玄中寺にまで足を運んだことは、発見以来ずっと、彼のこの寺に寄せる思いが変わらなかつたことを示しているよう思う。

ところが、この常磐という人物の、学者としての評価の高さに比すると、彼の学術的情熱を培つたものが、実は大谷派僧侶としてのそれに發していたことは、今日、あまり顧みられてはいない。ただし、その大谷派僧侶としての立場は、「文化工作」「仏教工作」という語を彼が頻繁に用いたように、一方では晩年の常磐が仏教を介して戦争との関わりを強める要因ともなつており、文献によるかぎり、発見者ということ以外、常磐の具体的な関与は見えてこないものの、玄中寺復興もまた、常磐にとってはそうした工作の一つであつたと考えられる。それでは、学術調査の成果としての玄中寺発見と、戦時下の工作としての玄中寺復興とは、常磐のなかでどのように結びついていたのだろうか。最後に、本章では、大谷派僧侶としての活動が活発となる、帝大退官以後の常磐

の事績をたどり、それとつきあわせることで、この問題について考察してみたい。⁽⁴⁷⁾

大谷派僧侶としての常磐の生涯は、彼の出生にまで遡る。すなわち、明治三年（一八七〇）、常盤は本願寺派の順忍寺住職の子として生まれ、小学校卒業とともに、大谷派の道仁寺に養子に入っている。⁽⁴⁸⁾ そして、東京浅草にあった大谷教校より、第一高等中学校を経て、東京帝国大学文科大学哲学科へと進学、明治四十一年（一九〇八）には同学文学部の講師となり、それ以後、昭和六年（一九三一）に退官するまでずっと、同

学で教鞭をとることになった。また、東方文化学院東京研究所の研究員として調査研究活動に従事するなど、帝大を退いてからも研究活動をつけ、その点、研究者としては面目躍如たるものがあったようである。

しかし、こうした一方で、昭和十四年（一九三九）二月、東本願寺の東京宗務出張所長、および、東京別院輪番の要職に就任しており、その職位にあつた三年の間には、関東大震災で全焼した浅草本願寺の復興を成し遂げるなど⁽⁴⁹⁾、大谷派僧侶としての重責を果たしていることは見逃せない。

ところで、『中外日報』をみると、この重職に就任する前後、昭和十三年（一九三八）頃から、常磐と戦争との関わりを示すような記事がいくつか掲載されるようになる。「対支文化問題と仏教」「大陸仏教工作」「興亞文化提携の契り」といった記事がそれで、こうした常磐の一連の発言は、彼の最晩年の中国行となつた、昭和十八年（一九四三）五月の

「成尋記念碑」の除幕式参列にもつながっている。なお、この昭和十八年時の中国行の経緯については、東北大学所蔵の「常磐関係資料」を分析している渡辺健哉氏の論考に詳しい。⁽⁵⁰⁾ すなわち、この中国行は、華北交通開封鉄路局調査課に在籍していた三好鹿雄から、開封に立碑された「成尋記念碑」の除幕式法要への参加を依頼されたことに発端したといい、上野修躋を伴って、開封の法要に参列して講演を行ったほか、その後は南京に向かい、前年の十二月、日本軍が土木工事中に発見したという玄奘三藏の遺骨を捧している。また、南京では、汪兆銘首席とも懇談をしたらしく、そこには汪政権の外交部長であり、仏教にも造詣の深かった褚民宜の招きがあったのだという。⁽⁴⁹⁾

ちなみに、こうした常磐の動向について、渡辺氏は、この時期、汪兆銘政権は、日本との紐帯を改めて確認することを喫緊の課題としていたとしたうえで、「常磐は学術界でも宗教界でも一つのオーソリティーとして国内外に認識されていた。そのため、こうした常磐の帶びている権威を利用する勢力が存在したであろうことは想像に難くない。結果として、本人の意思が何處に在ったかは関係なく、常磐はいわば政治的に利用された恰好となつたのである。こうした常磐自身の活動と彼を取り巻く状況こそ、常磐の研究が後世の研究者に引用されるものの、その人とかく掲載されるようになる。『対支文化問題と仏教』『大陸仏教工作』なりや社会的な活動の実態が紹介されにくくなる理由の一つではないか」と推測している。⁽⁵⁰⁾ しかしながら、常磐は決して政治的に利用されたのではなく、大谷派を代表する僧侶として、当時、国策ともされた中国開教

を奨励し、玄中寺復興や成尋碑建碑についても、それらが結果として政治的工作への寄与につながることは、十分に承知していたのではないだろうか⁵¹。たとえば、本願寺派の場合であれば、かつての法主、大谷光瑞が探検隊を編成して数々の学術成果を上げた、その一方で中国開教を積極的に推進していたのであり、大谷派の場合、それに匹敵する存在が、中国で学術調査を行い、すぐれた功績を上げてきた常盤であった可能性は高い。

ただし、興味深いのは、汪兆銘との会談において、玄奘遺骨の真贋について尋ねられた、それに対する常磐の回答である。「玄奘三藏の頂骨は間違ひの無いものか」という汪首席に対し、「今はそこまで立ち入らぬ方がよろしい」と常盤は答えたという⁵²。先にも触れたように、新聞報道では「常盤大定博士はかねてより大東亜共栄圏確立に協力する文化工作について傾聴すべき意見を持つて居り」などと報じられる常磐ではあつたが、その全部を肯定していたわけではなく、学術調査の域を超えて、文化工作、宗教工作が独り歩きをしていることに対する、学者として厳しい目を持っていたのだろう。それに比すれば、常盤が心から憧憬した玄中寺の復興は、宗教工作の舞台ではあつたにせよ、史実に基づいた聖地の復興であり、常盤の説いた日中間の「興亞文化提携」は、本来はこのような志向を持つものだった、と考えておきたい。

さて、本稿を締めくくるにあたって、もういちど、「小笠原宣秀資料」のうち、アルバムに残された常磐の姿に戻ってみよう。護衛ということ

なのだろう、軍服に身を包んだ若い兵士たちが多く写真に写りこむ、それに対して、スーツに身を包み、輪袈裟をかけた面々のなか、ひときわ立派な口髭を蓄えているのが常磐である⁵³。『中外日報』第一二九五四号の記事によれば、このとき、常磐とともに玄中寺に同行したのは、小笠原以外には、副導師をつとめた菅原惠慶（大谷派布教使）、津村雅量（本願寺派北支開教総長）、齋藤典察（浄土宗北支監督）、高澤量京（大谷派北支開教監督代理）で、そのほか来賓として、野口少尉、金森新民、会交城県首席参事などの参詣があつたといふ⁵⁴。残念ながら、写真上、その一人一人を特定することはできていないが、復興の経緯を改めてたどつてみると、玄中寺への途次、輿に揺られる常盤を含め、こうやって彼らの姿が画像として残されたというだけでも、小笠原の遺稿類を史料として俎上に乗せる、それだけの価値があると思われてならないのである。

おわりに

歴史教科書問題に顕著なように、日本と中国とが共同で過去の歴史を学び、それを将来に活かそうとするとき、必ずその弊害となるのが日中戦争である。しかし、日本が侵略を行ったこの戦争について、共通理解を持つことは難しくても、何らかの共感を覚える糸口を作ることができれば、両国間の関係を新しい方向に進めるることは決して不可能ではない。

その意味において、戦争下の学術調査には、外交戦略の道具という側面

と、政治的思惑を超えた人的交流の場という側面との二つの性格があり、本研究ではこの二面性のある資料を読み解き、将来的には現地調査も加えることで、日中戦争という負の歴史を、新しい視座から捉え直すための材料を、史料として提示したいと考えている。

もちろん、戦争という難しい問題をはらむ以上、こうした試みが必ずしも順調に進むわけではないだろう。しかし、昨年度は「小川貫式資料」を通して、日中戦争下の山西省五台山における復興の経緯とその歴史的意義について考察し、今年度は「小笠原宣秀資料」に基づいて、山西省玄中寺の復興の経緯と意義について考察を試みた次第である。なお、「小川貫式資料」のうち、たった一セット残された玄中寺の絵葉書が曇鸞年忌法要時の記念品であったことが、今回、「小笠原宣秀資料」を分析するなかから判明した⁽⁵⁸⁾。そして、そのことから見えてくるのは、個人個人の研究者が戦時下の中国で調査研究に携わった、その範囲は限られたものであつたにせよ、戦後七十年以上を経つた今、ジグソーパズルのように、残された資料をつなぎあわせていくことができれば、そこから多くのを発見することができるかもしれない、ということである。

最後に、もうひとつだけ、付言しておきたいことは、たとえば『真宗』⁽⁵⁹⁾という、大谷派の宗務所が発行している雑誌の、その表紙を飾る写真に注目してみると、昭和十六年（一九四一）までは中国の仏教史跡の写真で占められていたのに対して、昭和十七年（一九四二）以降はそれがアンコールワットにとって替わられていくことである。また、同時期、

『中外日報』でも、中国における学術調査の記事に加えて、アンコールワットの学術調査の動向を告げる記事が次第に頻出するようになる。北京や上海に比すると、辺境の地にも思える山西省ではあるが、五台山が日本人にとっては平安時代の昔から諸人憧憬する仏教聖地であったように、山西省は早くから仏教が隆盛した地であり、かつ、モンゴルと国境を接するところから民族間を超えた交易も営まれ、すぐれた経済性を備えた地域でもあった。それゆえ、五台山や玄中寺など、学術調査が盛んに行われ、宗教工作の恰好の舞台とされたのだと思われる。しかし、それとも、戦争下では一過性のものにすぎなかつたのだろう。太平洋戦争の動向を投影して、学術調査の対象もやがて南方へと移っていくことになったのである。

〔謝辞〕

本稿を執筆するにあたり、白須淨眞氏のほか、新潟大学国際センターの柴田幹夫氏からも、『中外日報』について貴重なご助言をいただいた。特に、『中外日報』は、本調査にとって基礎史料として非常に重要であったが、柴田氏からのご助言はとても大きな力となつたことをここに特記して、心からの感謝に変えたいと思う。また、龍谷大学の野世英水氏からも、『本願寺新報』をはじめ、近代仏教史関係の文献に関して、貴重なご教示を賜つた。心よりお礼を申し上げる次第である。

(1) 註

(9)

二十九年三月)。

「戦時下の中国仏教研究—西嚴寺蔵「小川貫式資料」と山西省調査記録」(同朋大学佛教文化研究所、平成二十八年十二月)。藤井由紀子・中川剛・高木祐紀・小川徳水・工藤克洋「特別調査報告 西嚴寺蔵「小川貫式資料」調査報告(一)」(同朋大学佛教文化研究所紀要)第三十六号(平成二十九年三月)。

(2)

(10)

白須淨眞氏は、大谷光瑞研究で知られる。主著に、『大谷探検隊研究の新たな地平—アジア広域調査活動と外務省外交記録』(勉誠出版社、平成二十四年八月)、「大谷光瑞とスヴェン・ヘディン—内陸アジア探検と国際政治社会」(勉誠出版社、平成二十六年九月)などがある。正確には、昭和十七年(一九四二)三月に帰国した貫式に対して、小笠原は貫式が帰国したその半年後、西本願寺興亜部から派遣されて渡中している。

(3)

(11)

明治三十六年(一九〇三)生まれ。昭和四年(一九一九)に龍谷大学文学部史学科を卒業後、龍谷大学予科教授を経て、昭和二十二年(一九四七)同学文学部の教授となる。主著に『中国淨土教家の研究』(平楽寺書店、昭和二十六年五月)、『中国近世淨土教史の研究』(百華苑、昭和三十八年四月)がある。

(4)

明治三十六年(一九〇三)生まれ。昭和四年(一九一九)に龍谷大学文学部史学科を卒業後、龍谷大学予科教授を経て、昭和二十二年(一九四七)同学文学部の教授となる。主著に『中国淨土教家の研究』(平樂寺書店、昭和二十六年五月)、『中国近世淨土教史の研究』(百華苑、昭和三十八年四月)がある。

(5)

平成二十九年(二〇一七)七月に、白須氏より「わすれな草」と背表紙に印刷されたアルバムを一冊、同年十二月にも同氏より自筆原稿を含む約四十点の資料群の貸与を受けている。

(12)

「山西五台山の／六月大会復興／靈峰に集ひ東亜仏徒大会／中滿蒙西から八万人」(『中外日報』第一二三五六号、昭和十五年六月二十八日発行)。以下、本稿で取り上げた『中外日報』記事については、楢木瑞生「『中外日報』紙のアジア関係記事目録」(同朋大学佛教文化研究所紀要)第十七号(平成十一年四月)を参照している。

(6)

(13)

小川貫式「五台山六月大会見学雑記」(西嚴寺蔵「小川貫式資料」、昭和十六年七月)。なお、貫式が参加したのは、昭和十六年六月に開催された、復興第二回目の六月大会であったとみられる。

(7)

藤井由紀子「五台山六月大会の復興と日中戦争—「小川貫式資料」にみる五台山」(同朋大学佛教文化研究所紀要)第三十六号(平成

二十九年三月)。なお、貫式が参加したのは、昭和十六年六月に開催された、復興第二回目の六月大会であつたとみられる。

(18)

『玄中寺』(日華親善曇鸞大師奉讚会、昭和三十一年十一月)。なお、常磐が玄中寺を訪れたときも、浄土教の聖地といつた霧雨気は皆目なかつたとみられる(井上淳念「念佛の祖廟玄中寺に詣づ(下)」、『中外日報』第一二七九三号、昭和十七年四月)。

(19)

新聞や宗報など、当時刊行された文献資料には、「宗教工作」「仏教工作」「文化工作」「宗教文化工作」「文芸工作」といった語が頻出する。宣撫工作としての中国開教を伝える記事では、これらの語が複合的に使われ、かつ、同様の意味内容を指していることから、本稿ではこれらの表現を使い分けることをせず、特に原文に従う場合を除いては、宗教工作という語を用いることとした。

(20)

昭和十七年（一九四二）、常盤と一緒に玄中寺法要に参列した小笠原は、翌年の『本願寺新報』に、現地で入手した話として、以下のようなことを紹介している。「さて此の玄中寺を訪れた邦人の最初の人として、故大谷尊由台下があることはあまり知られてゐない。現地で聞いた話であるが、台下は明治四十一年秋、清国開教総監として北京に滞在せられた頃前法主光瑞猊下の命をうけ五台山に西藏より來た達頼喇嘛に会見せられた帰途、太原より石壁山玄中寺に迄足を延ばされたといふ事である。この時隨行された四人の従者の中、三人までは故人になられ只一人生存してゐられるのであるが、私はその御方に会ふて当時の事を聞いた上でその事績を学界に紹介したいと思ってゐる。かう云つた問題は慎重を要するので今日これ以上記さない」とあり、常磐に先行して、西本願寺の法主・大谷光瑞の弟、尊由が訪れた可能性を示唆している（小笠原宣秀「北支玄中寺參拜記（下）」、『本願寺新報』第九百八十四号、昭和十八年二月十五日発行）。なお、明治四十一年（一九〇八）の尊由の玄中寺訪問の随行者については、『中外日報』第二五二六号（明治四十一年九月四日発行）が参考となる。すなわち、同年八月、尊由が西本願寺の清国開教総監として五台山会談に臨んだ際、本願寺派の中斐寛中（清国開教師）、香川黙識（顧問）、堀賢雄（教学參議部員）、および、淨土宗の峯畠善充（海外布教使）、大谷派の寺本婉雅（清國駐在）といつた者たちと一緒に五台山を訪れており、玄中寺への隨行者の面々も、おそらくはこれに重なるものと類推される。なお、五台山会談については、白須淨眞（一九〇八（明治四十一）年八月の清国五台山における一会談とその波紋—外交記録から見る外務省の対チベット施策と大谷探検隊—）（『広島大学大学院教育研究科紀要』第二部・

(21)

第五十六号、平成十九年十二月。後に『大谷探検隊研究の新たな地平—アジア広域調査活動と外務省外交記録』所収、勉誠出版社、平成二十四年八月）を参照のこと。

(22)

最も早い段階の日本人研究者の参詣は、大正十一年（一九二三）で、龍谷大学の禿氏祐祥、杉紫朗が玄中寺を訪れている（菅原恵慶「あとかき」『玄中寺と雲鸞大師』、ピタカ、昭和五十三年四月）。

(23)

昭和五年（一九三〇）五月、善導千二百五十年遠忌を記念して、塚本は、岸暢宏（知恩院門主）、定恵苗らとともに玄中寺に参詣している（注21菅原著書。定恵苗「石壁山拝礼記」（『日華仏教研究年報』第一年、昭和十一年八月）。塚本善隆は、昭和十七年（一九四二）雲岡石窟での講演会・座談会に出席した際にも玄中寺にも足を運んでいる。日程は七月三十一日から八月一日にかけてで、龍谷大学教授の月輪賢隆、大谷大学教授の道端良秀が同行したという（『支那仏教史学』第六卷第一号「學界彙報」、昭和十七年十二月）。

(24)

『支那仏教史学』第六卷第三号「學界彙報」（昭和十八年四月）。道端良秀「支那仏教調査報告概要」（『真宗』第五百二号、昭和十八年六月）。なお、道端の玄中寺行の第一回目は、昭和十七年（一九四二）三月、三上諦聽らの働きかけによって実現した東西淨土合同調査団への同行であり、第一回目は本文でも示した、同年七月・八月の塚本による調査への同行、第三回目は同年十月の雲鸞年忌法要への参加である。また、留学時のテーマとしては「玄中寺復興調査」のほかにもうひとつ、「支那仏教道教の調査研究」というのも挙げられている。

高木祐紀・小川徳水・藤井由紀子「史料紹介 西嚴寺藏『小川貫式資料』より太原崇善寺調査関係史料」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十六号、平成二十九年三月）。

（注21）『淨土門發祥地を調査／荒廃せる玄中寺／世界的な石仏や石經も発見』（『本願寺新報』九百二十六号、昭和十六年五月十五日発行）。

藤谷道威は「小川貫式資料」のうち、昭和十六年（一九四一）七月の「崇善寺藏經調査備忘錄」にも「藤谷主任」として登場する。小川貫式が崇善寺の僧侶たちの協力のもと、この寺に蔵されていた大

蔵経を調査したことは、昨年度の報告で紹介した通りであるが（注

25高木・小川・藤井史料紹介）、その一年三ヶ月後、崇善寺が曇鸞千

四百年忌法要の会場となつたことは、当時の山西省での仏教系研究

者たちのつながりと行動範囲が、非常に密なるものであったことを

うかがわせて興味深い。なお、この藤谷は、三上らによる調査活動

だけではなく、後述する高原一道の念佛復興の双方に携わっていたよ

うである。

（28）『支那仏教史学』の「學界彙報」では、「在北支興亞院の仏教史蹟調

査団」という称で、三上らによる玄中寺調査のことが記されている

（29）『支那仏教史学』第五卷第一号、昭和十六年六月）。

（30）『中外日報』第一二七一七号（昭和十七年一月十五日発行）。

（31）『本願寺新報』第八九八号（昭和十五年七月五日発行）。

（32）他にも、「大陸に建設すべき／仏教文化を問ふ／生活問題と並行し／

宗教工作を進めよ／エキスパートの進出を望む／三上諦聴」（『本願

寺新報』第八九八号（昭和十五年七月五日発行）など。

たとえば、「太原の玄中寺中心に／支那浄土教の復興へ／大陸の陣容

成り・内地に叫ぶ／三上氏帰朝談」（『中外日報』第一二五八八号

（昭和十六年八月七日発行）、「北支玄中寺の／復興運動活潑」（『中外

日報』第一二六〇四号（昭和十六年八月二十六日発行）、「太原玄忠

寺中心の／中国浄土教復興議す／日本浄土教三派人の会合」（『中外

日報』第一二六一四号、昭和十六年九月六日発行）、「曇鸞大師千四

百年の法要を／全支那の大祭運動に／北支の玄中寺復興計画」（『中

外日報』第一二七一七号（昭和十七年一月十五日発行）、「玄中寺で、

曇鸞大師／千四百年記念法要」（『本願寺新報』第九五〇号（昭和十

七年一月十五日発行）、「玄中寺の復興／漫々乎で行け／三上諦聴氏

談」（『中外日報』第一二七四二号（昭和十七年二月十四日発行）な

ど、玄中寺復興を含めて、當時、若き三上の活躍を称える記事は多

い。

（33）東西浄土合同調査団のメンバー構成は、浄土系三宗派の北支開教首脳者である齊藤氏（浄土宗開教総監）、津村雅量（本願寺派北支開教総長）、新郷氏（大谷派北支開教監督）に加えて、道端良秀（大谷大

学教授）、井上淳念（太原東本願寺）が同行したほか、興亞院、北京仏教連合会、太原の中國側要人、玄中寺付近の中國住民へも参加を

よびかけたという。

井上淳念「念佛の祖廟玄中寺に詣づ（上）（下）」（『中外日報』第一二七九二号（昭和十七年四月十六日発行）、『中外日報』第一二七九三号、昭和十七年四月十七日発行）。

（34）『本願寺新報』第九三四号（昭和十六年八月五日発行）。なお、本論では、マイクロフィルム版を参照したが、いくつか文字が潰れ、文

字の判読できない箇所があり、それは■で示した。

同記事には統きがあり、玄中寺復興の法要が行われる昭和十七年度の運動計画についても、次のように記載されている。「最近ことに昭和十七年度（民国卅一年度）の運動計画として左のプランが西本願寺によせられたがそれによると山西仏教会の運動としては（イ）民

国三十年よりの山西仏教会及び山西中國基督教教會各地区分会支部を三月十六日までに完了せしめる（ロ）三月末日（陰曆二月十五日）

の祝尊涅槃会には太原外六重要地域で分会や支会結成大会を開催す

るといふことになつて居るが、その中心活動たる「念佛運動」の■

■■■■■ 支那民衆の心の底の底までつかんで行かうといふ計

画が進められて居る、すなはち 右山西仏教總会各県支会の指導の

もとに山西省全地の各郷村に「念佛堂」を開き其地其地の民衆教化

の根本道場たらしめるが、そのためにはすでに教化の中心人物とし

て力宏力空、法筵、明義、慧如、禪洞、象離、象証の各法師たちを

中心に動員することとなり本部や地方支会からも常に派遣講師などを派出「念佛堂」を巡回教化せしめる（後略）」（『中外日報』第一二

七六二号（昭和十七年三月十日発行）。なお、この高原が五台山復興

にも深く関与していたことは、高原一道「五台山概観 附共產軍の迫害」（『教誨一瀾』第八六四号、昭和十四年二月）、三上諦聴「五台

山紀行」（『支那仏教史学』第四卷第三号、昭和十五年十一月）など

によりわかる。玄中寺復興を五台山のそれと比べると、五台山では特務機關など、陸軍が主導し、新民会を通じた宣揚を徹底することで六月大会復興

（37）

が成し遂げられていたのに対して、玄中寺復興を主導したのは浄土系三宗派を中心とした仏教界であった印象を受ける。もちろん、それもまた、大東亜共栄圏の建設という理想のもとに行われていた、宗教工作としての意味合いの強いものではあったが、五台山の場合、複数民族の交差する古くからの要衝であり、交易も盛んに行われた、その国際性と経済性ゆえに、軍部によって特段に重要視されたのではないかと考える（注8藤井論文）。

（38） 戰前に公刊された常盤の研究書は以下の通りである。閔野貞・常磐大定『支那仏教史蹟』第一輯（第五輯、仏教史蹟研究会、大正十四年六月～昭和三年三月）。常磐大定『支那仏教史蹟記念集』（仏教史蹟研究会、昭和六年十一月）、閔野貞・常磐大定『支那文化史蹟』（二）～（二）、法藏館、昭和十四年（十六年）。

（39） 常盤大定「山西省石壁山玄中寺土彌鑑大師の遺蹟 附玄中寺鳥瞰図」（『支那仏蹟踏查 古賢の旅』金尾文淵堂、大正十年八月）。

（40） 常磐は昭和二十年（一九四五）五月五日、享年七十七歳で死去している。

（41） 近年、東北大学の常磐関係の資料に基づいて、常磐に関する研究を発表している渡辺健哉氏も、この点について、「これまでほぼ言及されることのなかった、アジア太平洋戦争中における常盤の活動」と注意を喚起している（渡辺健哉「東北大学附属図書館蔵「玄奘三蔵求法像」をめぐって—常磐大定と汪兆銘政府をつなぐ一幅」）。

（42） 「集刊東洋学」第一一二号、平成二十七年一月）。本論で述べた常磐の帝大退官後の動向については、この論文に負うところが大きい。常磐が七十七歳で没したのもこの道仁寺である。

（43） 東本願寺では自派の勢力を東京で伸長させるため、東京宗務出張所の所長に大物を充てることが計画されたのだという（注41渡辺論文）。

（44） 昭和十七年（一九四二）六月で東京別院輪番を退いている。昭和十四年（一九三九）十一月十二日、浅草本願寺本堂の再建工事が完了し、完成祝して遷仏法会が行われている（常磐大定『浅草本願寺の御入仏式に際して—開山聖人の教を仰ぎ時局に対しても門末の行くべき道を述ぶ』、本願寺入仏式パンフレット、昭和十四年十一月）。

（46） 小笠原義雄『浅草本願寺史』（浅草本願寺、昭和十四年十一月）。

（47） 「対支文化問題と仏教／文学博士常磐大定」（『中外日報』第一一五〇号、昭和十三年一月一日発行）、「大陸仏教工作／文学博士常磐大定」（『中外日報』第一一八〇九号、昭和十四年一月一日発行）、「北京で開催される／東亞文化協議会／仏教家として唯一人の／常磐大定博士渡支」（『中外日報』第一二〇〇五号、昭和十四年八月二十五日発行）、「常磐大定博士の主唱で／興亞文化提携の契り／王揖唐氏等要人も參集／北京東本願寺の親善風景」（『中外日報』第一二〇二二号、昭和十四年九月十四日発行）、「文化遺蹟の保存・研究／東亞文化協議会の新事業／常磐大定博士に期待」（『中外日報』第一二五九四号、昭和十六年八月十四日発行）。

（48） 成尋は五台山など、中国仏跡を巡礼した、鎌倉時代の著名な日本人僧侶である。

（49） 注41渡辺氏論文。なお、氏の常磐研究には、ほかに以下のようなものがある。渡辺健哉「常磐大定と閔野貞—『支那仏教史蹟』の出版をめぐって」（平勢隆郎・塩沢裕仁編『閔野貞大陸調査と現在II』、東京大學東洋文化研究所、平成二十六年九月）、同「常磐大定の中国調査」（『東洋文化研究』第十八号、平成二十八年三月）。

（50） 複民誼が大東亜省次官の山本熊一と同省支那事務局長である宇佐美珍彦を通じて南京訪問を要請したという（注41渡辺氏論文）。

注41渡辺氏論文。

（51） 大谷派、本願寺派に限らず、当時の仏教系の研究者たちは、宣撫工作の有力な手段として國からも奨励された、中國開教と大きく関わっている。多くの研究者がそうした宗教工作を通して戰局に寄与することを当然と考えていたのではないか、とみられる。

（52） 上野修躋「汪主席と常磐博士／（日華の文化交流（四））」（『中外日報』第一三二四四号、昭和十八年六月十八日発行）。

（53） 「常磐大定博士／半生の勞作／支那文化史蹟／汪主席に贈る」（『中外日報』第一二六一四号、昭和十六年九月六日発行）。

（54） 「玄中寺法要を終へて」とキャプションの付された写真について、浄土系三宗派の代表が参列した法要でありながら、輪袈裟を首から掛け

けただけのいでたちであることについては、「この日われらは内地より本装束を持参せるも、雨中難渋きはある山道のため何一つ携帯品を所持する能はず、苦力さへも持ち搬ぶことを得ざる有様にて残念ながら洋服の上に輪袈裟をかけしままにてかたの如く法要を心から厳修申し上げたのである」という菅原惠慶のレポートが参考となる（菅原惠慶「玄中寺法会に詣づ」、『中外日報』第一二九五四号、昭和十七年十月二十八日発行）。

(55)

(56)

(57)

眼鏡をかけ、ひときわ若い、坊主頭の人物が小笠原である。
なお、「小笠原宣秀資料」のなかには、「民国三十一年／交城県石壁玄中寺〔永寧寺〕概述」と題された、新民会交城県総会事務部指導課編集の孔版印刷のレジュメがある。新民会は、正式名称を中華民国新民会といい、日中戦争開始後に日本軍が樹立した中華民国臨時政府を擁護するため、同じく日本軍によつて北京に創設された、中國の民衆教化団体であるが、玄中寺法会への首席参事の出席や、こうしたレジュメの存在によつて、五台山と同様、玄中寺の復興にも日本陸軍の指導のもと、新民会が深く関与していたことがわかる。

『中外日報』第一二九五四号（昭和十七年十月二十八日発行）。

(58) (59)
「なほ法要に際して奉讚会より「石壁山玄中寺略史」（道端良秀著）並に玄中寺繪葉書が記念として発行された」と、『支那仏教史学』の彙報には記されている（『支那仏教史学』第六卷第三号「学界彙報」、昭和十八年四月）。
大谷派宗務所社会課が発行している定期刊行物である。

(59)

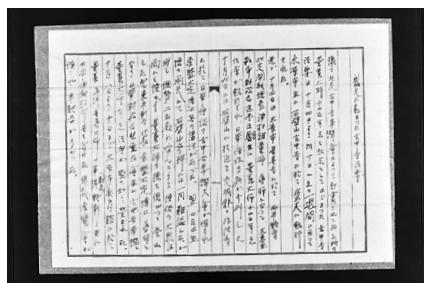


図8-9 「小笠原宣秀資料」より「盛大に謹つた玄中寺法要」
(撮影：日比野洋文)

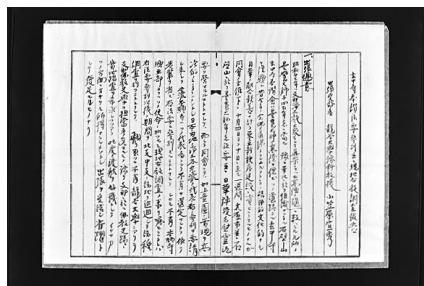


図6-7 「小笠原宣秀資料」より「玄中寺奉讃法要參列並二現地布教調査報告」
(撮影：日比野洋文)

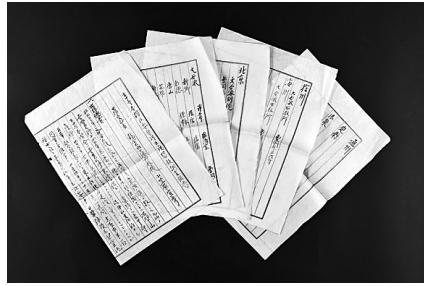


図6-7

「小笠原宣秀資料」より「玄中寺奉讃法要參列並二現地布教調査報告」



図1 「小川貫式資料」より「玄中寺壇鸞千四百年忌法要ボスター」
(撮影：小川徳水)

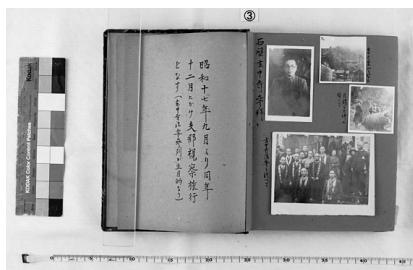


図2-5 「小笠原宣秀資料」よりアルバム「わすれな草」
(撮影：日比野洋文)



④



⑤



⑥

表1 西福寺蔵「小笠原宣秀資料」リスト

整理番号	資料名	年代	発行	点数
1	獲鹿県地図	民国 30 年 10 月	獲鹿県公署建設科 (小笠原自身の手書きか?)	1 枚
2	獲鹿本願寺境内略図	民国 31 年	新民会交城県総会事務部指導科	1 枚
3	交城県石壁山玄中寺(永寧寺)観測	(昭和 17 年)	小笠原宣秀	5 枚
4	玄中寺奉讃法要參列並ニ現地布教調査報告	(昭和 17 年)	小笠原宣秀	2 枚
5	盛大に勤まつた玄中寺法要	(昭和 17 年)	小笠原宣秀	4 枚
6	靈巖・道輪・壽尊釋迦述リスト(タイトルなし)		日華親善靈巖大師奉讃会	1 枚
7	日本淨土教の発祥地	昭和 31 年 12 月 1 日	日華親善靈巖大師奉讃会	1 枚
8	玄奘三藏一千三百年忌記念展覽目錄		中外日報社	1 枚
9	中外日報 第 12911 号 「玄中寺調査団龍大師派遣員」	昭和 17 年 9 月 4 日	中外日報社	1 枚
10	中外日報 第 12928 号 「人の往来 ○小笠原宣秀氏(龍大教授)」	昭和 17 年 9 月 24 日	中外日報社	1 枚
11	中外日報 第 12930 号 「雜記帳/真宗 △玄中寺の法要に本派代表の小笠原」	昭和 17 年 9 月 27 日	中外日報社	1 枚
12	中外日報 第 12938 号 「呼び戻す “日本のみの母” の心 天津西別院西脇輪番談」	昭和 17 年 10 月 7 日	中外日報社	1 枚
13	中外日報 第 12940 号 「大東亜精神建設の誓ひもかたく 北支玄中寺で盛大に日華合同の大遠忌」	昭和 17 年 10 月 9 日	中外日報社	1 枚
14	中外日報 第 12949 号 「玄中寺法会に詣づ 菩提山惠慶」	昭和 17 年 10 月 22 日	中外日報社	1 枚
15	中外日報 第 12954 号 「玄中寺に詣づ(小笠原宣秀)」	昭和 17 年 10 月 28 日	中外日報社	1 枚
16	中外日報 第 12963 号 「学界に初めて紹介 山西南部仏跡調査資料 岩洞内に唐代石経等発見」	昭和 17 年 11 月 8 日	中外日報社	1 枚
17	中外日報 第 12977 号 「世界的な金版藏経を 第八路軍が悉く掠奪 道端谷大教授受山西調査終る」	昭和 17 年 11 月 26 日	中外日報社	1 枚
18	中外日報 第 12978 号 「多量の学術収穫 大東亜佛教調査会を設けよ 小笠原龍大教授談」	昭和 17 年 12 月 15 日	中外日報社	1 枚
19	中外日報 第 12993 号 「外日報 第 18207 号」	昭和 38 年 10 月 27 日	中外日報社	1 枚
20	本願寺新報 第 982 号 「北支玄中寺參拜記(上) 小笠原宣秀」	昭和 18 年 2 月 5 日	本願寺新報社	1 枚
21	本願寺新報 第 984 号 「北支玄中寺參拜記(下) 小笠原宣秀」	昭和 18 年 2 月 15 日	本願寺新報社	1 枚
22	龍谷大学新聞 第 125 号	昭和 14 年 3 月 25 日	龍谷大学新聞社	1 枚
23	龍谷大学新聞 第 166 号 「支那は大東亜の肝 小笠原教授開講談 研究所も現地に置け」	昭和 17 年 12 月 25 日	龍谷大学新聞社	1 枚
24	東亜新報 第 1191 号	昭和 17 年 10 月 25 日	僑東亜新報社	1 枚
25	東亜新報 第 1191 号	昭和 17 年 10 月 25 日	僑東亜新報社	1 枚
26	東亜新報(山西) 第 1518 号	昭和 17 年 10 月 21 日	東亜新報社太原支社	1 枚
27	西湖日報 第 1744 号 「京都大学江口院長就任式(仏大の特別講義)」	昭和 17 年 11 月 25 日	杭州特務機關/同盟通言杭州支局	1 枚
28	西湖日報 第 1745 号 「仏教大學江口院長就任式(仏大の特別講義)」	昭和 17 年 11 月 26 日	杭州特務機關/同盟通言杭州支局	1 枚
29	西湖日報 第 1748 号 「中支の飛来峰石窟は宋朝の偉大な石窟 龍大の小笠原教授視察」	昭和 17 年 11 月 29 日	杭州特務機關/同盟通言杭州支局	1 枚
30	文化時報 第 3335 号 「中支の飛来峰石窟は宋朝の偉大な石窟 龍大の小笠原教授視察」	昭和 17 年 12 月 13 日	僑文化時報社	1 枚
31	文化時報 第 3338 号 「西六小事 北、中支の仏教視察の旅を終へた龍大の小笠原教授は~」	昭和 17 年 12 月 17 日	僑文化時報社	1 枚
32	戲劇報 第 1514 号 「京都大学江口院長就任式(仏大の特別講義)」	民国 31 年 10 月 1 日	朱書紳	1 枚
33	大同靈巖石窟寺古蹟詳説	民国 31 年 4 月	晉北自治政府民生厅	1 枚
34	大同靈巖石窟寺古蹟詳説	民国 27 年 5 月 1 日	晉北自治政府民生厅	1 枚
35	スクリップ・バック寫真 1 枚 「昭和 13 年夏 渡支を前にして」	昭和 13 年夏 ~	35 枚	未勘定
36	モノクロ写真(小判) 紙袋入り 「支那旅行写真在中」			
37	モノクロ写真(小判) 紙袋入り 「支那旅行写真在中」			
38	モノクロ写真・照片 紙箱入り 「ORIENTAL photographic paper」	昭和 17 年 9 月 ~	1 冊(32 紙)	
39	アルバム わすれな草 第 32 号 「昭和 17 年九月より同年十二月にかけ支那視察旅行をなす(玄中寺法要參列が主目的なり)」			
40	南京青年会叢書 小川賀文著 六朝の勝地 千仏の名鑑 横霞山史蹟 ※アルバム挟み込み資料	昭和 15 年 7 月 1 日	南京青年会	1 冊
41	山西全省分県詳圖 ※アルバム挟み込み資料	民国 31 年 5 月	北京建設圖書館	1 枚
42	山西省図 ※アルバム挟み込み資料			1 枚

表2 玄中寺復興関連年表

年月日	事項	出典
明治 31 年 明治 41 年 7 月	常盤大定が東京帝國大学文科学部哲学科を卒業する 常盤大定が東京帝國大学文学部の講師を委嘱される	※
明治 41 年秋	大谷尊由が玄中寺を訪問する 大谷尊由は大谷光瑞の弟で、清国開教総監として当時北京に滞在中であった人物である	『本願寺新報』第 984 号（昭和 18 年 2 月 15 日）
大正 9 年 9 月 24 日 ～大正 10 年 1 月 5 日まで	常盤大定が第 1 回支那仏教史蹟踏査に出発する	常盤大定『支那仏蹟踏査 古賢の旅』（金尾文淵堂、大正 10 年 8 月 20 日）
大正 9 年 10 月 27 日 ～ 10 月 28 日	常盤大定が玄中寺を再発見する	同『支那仏教史蹟踏査記』（龍吟社、昭和 13 年 9 月 1 日） 同『支那仏教の研究 第三』（昭和 18 年 11 月 20 日、春秋社）
大正 10 年 9 月 14 日 ～大正 11 年 2 月 19 日	常盤大定が第 2 回支那仏教史蹟踏査に出発する	常盤大定『支那仏教史蹟踏査記』 (龍吟社、昭和 17 年 12 月再版)
大正 11 年 9 月 29 日 ～大正 11 年 12 月 19 日	常盤大定が第 3 回支那仏教史蹟踏査に出発する	常盤大定『支那仏教史蹟踏査記』 (龍吟社、昭和 17 年 12 月再版)
大正 12 年	龍谷大学教授の禿氏祐祥、杉紫朗が玄中寺を訪問する	『本願寺新報』第 984 号（昭和 18 年 2 月 15 日発行） 菅原惠慶「あとがき」(『玄中寺と晏鸞大師』、ピタカ、昭和 53 年 4 月 1 日発行)
大正 13 年 頃	知恩院の定慧苗が玄中寺を訪問する 知恩院を代表し、善導 1200 年遠忌を記念した参拝だったという	『本願寺新報』第 984 号（昭和 18 年 2 月 15 日発行）
大正 13 年 10 月 8 日 ～ 11 月 6 日	常盤大定が第 4 回支那仏教史蹟踏査に出発する	常盤大定『支那仏教史蹟踏査記』 (龍吟社、昭和 17 年 12 月再版)
大正 14 年 6 月	常盤大定・閑野貞の共著『支那仏教史蹟』第一輯が刊行される	常盤大定・閑野貞『支那仏教史蹟』第 1 輯（仏教史蹟研究会、大正 14 年 6 月）
大正 15 年	常盤大定が東京帝國大学の教授となる	※
大正 15 年 4 月	常盤大定・閑野貞の共著『支那仏教史蹟』第二輯が刊行される	常盤大定・閑野貞『支那仏教史蹟』第 2 輯（仏教史蹟研究会、大正 15 年 4 月）
大正 15 年 10 月	奥村伊九良が玄中寺を参拝する	菅原惠慶「あとがき」(『玄中寺と晏鸞大師』、ピタカ、昭和 53 年 4 月 1 日発行)
大正 15 年 12 月	常盤大定・閑野貞の共著『支那仏教史蹟』第三輯が刊行される	常盤大定・閑野貞『支那仏教史蹟』第 3 輯（仏教史蹟研究会、大正 15 年 12 月）
昭和 2 年 12 月	常盤大定・閑野貞の共著『支那仏教史蹟』第四輯が刊行される	『中外日報』第 7992 号（大正 15 年 5 月 2 日）
昭和 3 年 3 月	常盤大定・閑野貞の共著『支那仏教史蹟』第五輯が刊行される	常盤大定・閑野貞『支那仏教史蹟』第 4 輯（仏教史蹟研究会、昭和 2 年 12 月）
昭和 3 年 12 月 14 日 ～昭和 4 年 1 月 30 日	常盤大定が第 5 回支那仏教史蹟踏査に出発する	常盤大定・閑野貞『支那仏教史蹟』第 5 輯（仏教史蹟研究会、昭和 3 年 3 月）
昭和 5 年 5 月 15 日	善導 1250 年遠忌を記念して岸信宏、定慧苗、塙本善蔵が玄中寺に参拝する 他に雲岡石窟、天龍山石窟を見学する	常盤大定『支那仏教史蹟踏査記』 (龍吟社、昭和 17 年 12 月再版) 菅原惠慶「あとがき」(『玄中寺と晏鸞大師』、ピタカ、昭和 53 年 4 月 1 日発行) 菅原惠慶「石壁山拜礼記」(『日華仏教研究会年報』第 1 年、昭和 11 年 8 月)

昭和 6 年	常盤大定が東京帝國大学を退官する (退官後は東方文化学院(東京)の研究員として活躍する) (東方文化学院は外務省文化事業部の後援によって設立された機関)	※
昭和 12 年 1 月	支那仏教史学会が創立される 『支那仏教史学』を発行し、臨時例会、大会を行う	『支那仏教史学』第 7 卷第 1 号「學界彙報」 (昭和 18 年 6 月)
昭和 12 年 7 月	藤野立然・ <u>豪齋大師管見</u> が『支那仏教史学』第 1 卷第 2 号に掲載される	『支那仏教史学』第 1 卷第 2 号(昭和 12 年 7 月)
昭和 13 年 1 月	常盤大定が対支文化問題と仏教工作について『中外日報』正月号で語る	『中外日報』第 11509 号(昭和 13 年 1 月 1 日)
昭和 13 年 4 月 18 日	玄中寺了世和尚が太原東本願寺を訪問して、豪齋・普尊の靈廟保存を特請する 昭和 13 年当時、玄中寺は日本軍の保護下にあってかさらなる保護を求めたという 太原東本願寺の井上淳念が交渉部隊長宛に書簡を認めて了世に手渡す	『中外日報』第 15066 号(昭和 13 年 4 月 22 日)
昭和 13 年 12 月 頃	加藤豊正が山東省にて中国僧侶と提携して民衆教化を行う 山東省濰県に東本願寺が開かれる 毎月 3 ~ 4 回のム教会例会を開催	『中外日報』第 16212 号(昭和 13 年 12 月 22 日)
昭和 14 年 1 月	豪齋時代の淨土教を再説し、真宗的宣布を行う(親鸞的念佛宣佈の土壤つくり) 東本願寺の福業教化研究所所長宛の「加藤書簡」掲載	『中外日報』第 11807 号(昭和 14 年 1 月 1 日)
昭和 14 年 2 月末日	常盤大定が大陸仏教工作について『中外日報』正月号で語る	※
昭和 14 年 8 月	常盤大定が東本願寺東京宗務出張所長兼東京別院輪番に任じられる 東本願寺では自派勢力伸長のため、大派選出を計画したといふ	『中外日報』第 12005 号(昭和 14 年 8 月 25 日)
昭和 14 年 9 月	常盤大定が北京で開催される東亜文化協議会に、唯一、仏教家として出席する 東亜文化協議会は日中の要人学者より成る協議会である	『中外日報』第 12022 号(昭和 14 年 9 月 14 日)
昭和 14 年 9 月 12 日	常盤大定が雲岡石窟を訪れる 愛石松男や安倍健夫らと会う	※
昭和 14 年 10 月 16 日	道端良秀「支那における仏教の民衆教化」が『中外日報』に掲載される	『中外日報』第 17887 号(昭和 14 年 10 月 16 日)
昭和 14 年 11 月 12 日	関東大震災で全焼した浅草本願寺本堂の再建工事が完了し、完成を祝して遷仏法会が行われる 常盤大定の輪番在職中の最も重要な出来事が浅草本願寺本堂再建である 午前に大定は導師として遷仏式が举行される 午後には大谷光鵠法主を大導師として入仏式が行われる 本堂の再建を記念して大谷光鵠寺史(が刊行される (著者は小笠原義雄で、大定はその序文をしためている)	常盤大定『浅草本願寺の御入仏式に際して開山聖人の教を仰ぎ時局に對して門末の行くべき道を述ぶ』 (本願寺入仏式パンフレット、昭和 14 年 11 月) 小笠原義雄『浅草本願寺史』(浅草本願寺、昭和 14 年 11 月)
昭和 15 年 6 月 28 日	五台山で第 1 回の復興六月大会が大々的に開催される	『中外日報』第 12256 号(昭和 15 年 6 月 28 日)
昭和 15 年 7 月 5 日	本願寺留学生である三上諦麿のことが『本願寺新報』の宗教工作記事のなかで紹介される	『本願寺新報』第 898 号(昭和 15 年 7 月 5 日)
昭和 15 年 11 月 10 日	三上諦麿・沒法子の夫並が『本願寺新報』に掲載される 芝原玄超と小笠原宣秀の対談が『本願寺新報』に掲載される	『本願寺新報』第 909 号(昭和 15 年 11 月 10 日)
昭和 16 年 1 月 25 日	芝原玄超はいわゆる開教首の対談が、北支布教総監・開教総長にして北京別院輪番である	『本願寺新報』第 915 号(昭和 16 年 1 月 25 日)
昭和 16 年 3 月下旬	在北支興亜院の仏教史讀誦会員が玄中寺を訪問する 興亜院の命による調査团で、メンバーは三上諦麿、吉井芳紙、松井聰頼、藤谷道威 二上は西本願寺の興亜留学生、吉井は眞言宗金剛峯寺留学生、松井、藤谷は本願寺派所属 荒廢した玄中寺の復興が協議され、本願寺派北支布教総監の芝原玄超の関心を引いたという	『支那仏教史学』第 5 卷第 1 号「學界彙報」(昭和 16 年 6 月)
昭和 15 年 3 月以降	石壁山玄中寺復興委員会が結成される	『本願寺新報』第 926 号(昭和 16 年 5 月 15 日)
昭和 16 年 6 月 25 日	五台山で復興六月大会(第 2 回)が大々的に開催される	『本願寺新報』第 926 号(昭和 16 年 5 月 15 日)
～ 7 月 23 日	小川貴式がこの第 2 回大会時に五台山を参拝する	「小川貴式資料」(西巣寺、昭和 16 年)

昭和 16 年 8 月 5 日	高原一造「念仏に蘇へる北支山西省」が『本願寺新報』に掲載される	『本願寺新報』第 934 号（昭和 16 年 8 月 5 日）
昭和 16 年 8 月 6 日	三上謫職が中原より帰國する事が報じられる 三上は櫻井健太郎大佐の支援をうけている事と報じられる	『本願寺新報』第 935 号（昭和 16 年 8 月 15 日）
昭和 16 年 8 月 7 日	帰國した三上謫職が浄土系各宗本山に玄中寺復興を呼びかけ、調査団の派遣を提案する 三上は興正院の了解のもとで玄中寺復興運動を開始したという	『中外日報』第 12588 号（昭和 16 年 8 月 7 日）
昭和 16 年 8 月 15 日	三上謫職が帰国して東亜語学校を建設を要請する 帝教に成美が付かない現地の要望を受けた形である	『本願寺新報』第 935 号（昭和 16 年 8 月 15 日）
昭和 16 年 8 月 26 日	芝原玄超が玄中寺復興委員会（仮称）について本山で報告の予定と報じられる 三上謫職を中心として玄中寺復興運動が活発化する	『中外日報』第 12604 号（昭和 16 年 8 月 26 日）
昭和 16 年 9 月 4 日	日本淨土教三派が会合して玄中寺を中心とする中国淨土宗復興策を議する 淨土宗の養眞會社会課長、大谷派の大山賢興部長、西本願寺の興亜部賢事高橋弘道	『中外日報』第 12614 号（昭和 16 年 9 月 6 日）
昭和 16 年 9 月 6 日以降	常盤大定『支那文化史蹟』を国民政府主席の汪超銘に贈する 常盤は大東亜共闘團確立に文化工作で協力と報じられる	『中外日報』第 12614 号（昭和 16 年 9 月 6 日）
昭和 17 年 1 月 15 日	玄中寺で来春 5 月に豪傑大師千百忌記念法要を行う計画が発表される 本願寺派の北支開教総長の津村雅量が玄中寺復興計画について語る	『中外日報』第 12717 号（昭和 17 年 1 月 15 日） 『本願寺新報』第 950 号（昭和 17 年 1 月 15 日）
昭和 17 年 2 月 14 日	山西運城の開帝廟大祭の五台山六月大会などの大祭に呼応させる計画だという	『中外日報』第 12742 号（昭和 17 年 2 月 14 日）
昭和 17 年 3 月 27 日	婦中國の三上謫職が玄中寺復興について『中外日報』で談ずる 東西争士合同調査团が玄中寺を参詣する 調査团メンバーは淨土系三宗派の北支開教首脳者	『中外日報』第 12717 号（昭和 17 年 1 月 15 日） 『中外日報』第 12792 号（昭和 17 年 4 月 16 日） 『中外日報』第 12793 号（昭和 17 年 4 月 17 日）
昭和 17 年 4 月 1 日	道端良秀（大谷大学教授、津村雅量・本願寺派・新郷・大谷派・井上淳念・本願寺派・新郷・大原東本願寺）が同様に開基院、北京仏教連合会、太原の支那側要人、玄中寺付近の華人へも参加を呼び掛けたという 道端良秀が『支那仏教史学』に玄中寺復興について執筆する 道端は北支留学中、交賀県に根拠を置いて、3 度、玄中寺の調査を行ったという (昭和 17 年 4 月、昭和 17 年 7 月・8 月、昭和 17 年 10 月)	『支那仏教史学』第 6 卷第 1 号「學界集報」（昭和 17 年 7 月） 道端良秀「支那仏教調査報告概要」「真宗」第 502 号、昭和 18 年 6 月 道端良秀「金石資料による石壁玄中寺史の研究」「大谷学報」第 26 卷第 1・2 合併号、昭和 21 年 10 月 『中外日報』第 12834 号（昭和 17 年 6 月 6 日）
昭和 17 年 6 月	雲岡石窟で日本仏教資料展を兼ねて石仏法要が行われる 雲資料展を監修した塚本善隆が参列する	※
昭和 17 年 6 月	常盤大定が東京別院輪番を辞任する	『支那仏教史学』第 6 卷第 2 号「學界集報」（昭和 17 年 12 月）
昭和 17 年 6 月 30 日	塚本善隆が北京仏教界の有力者と交歓する	
～ 7 月 3 日	塚本善隆が五台山、玄中寺を見学する	
昭和 17 年 7 月 18 日	塚本善隆が雲岡石窟で講演会・座談会に出講する 蒙古政権に招請され、雲岡石窟供養法要、仏教展覧会指導が主目的であったという	『中外日報』第 12904 号（昭和 17 年 8 月 27 日）
昭和 17 年 7 月 20 日	塚本善隆が五台山に滞在する	『中外日報』第 12911 号（昭和 17 年 9 月 4 日）
～ 7 月 28 日		『本願寺新報』第 972 号（昭和 17 年 9 月 13 日）
昭和 17 年 7 月 31 日	塚本善隆が五台山、玄中寺を見学する 月輪賢隆（龍谷大学教授）、道端良秀（大谷大学教授）が同行する	『中外日報』第 12919 号（昭和 17 年 9 月 13 日）
～ 8 月 1 日	東本願寺がアンコールワットを中心とした南方美術史跡調査隊を派遣する	
昭和 17 年 8 月	玄中寺調査团の龍谷大学側の派遣員は予科教授の小笠原宣秀と決定する	
昭和 17 年 9 月 4 日	玄中寺の日華合司蒙鑑大師大法要の日程が決まる	
昭和 17 年 9 月 13 日		

昭和 17 年 9 月 20 日 ～ 9 月 22 日	菅原惠慶「北支玄中寺に於ける臺灣遠忌を迎へて（上）（下）」が掲載される	『中外日報』第 12925 号（昭和 17 年 9 月 20 日） 「中外日報」第 12926 号（昭和 17 年 9 月 22 日） 「アルバムわすれな草」（小笠原宣秀資料、西福寺、昭和 17 年）
昭和 17 年 9 月 ～ 12 月	小笠原宣秀が玄中寺参詣をする 主目的は玄中寺参詣であったという	道端良秀「山西省署州及び高平の石窟調査」 （『大谷学報』第 24 卷第 4 号、昭和 18 年 8 月）
昭和 17 年 10 月 3 日	道端良秀が玄中寺復興奉贊大法会の準備に携わる	道端良秀「山西省署州及び高平の石窟調査」 （『大谷学報』第 24 卷第 4 号、昭和 18 年 8 月）
昭和 17 年 10 月 4 日	玄中寺臺灣千四百年忌法要が日中合同で開催される 日本側導師は津村雅量（本願寺派比支開教總長）、中国側導師は庄洋輔（崇善寺住持） そのほか、山西首長、山西省仏教總會長、山西仏教後援會長、日華僧侶者慰靈法要、臺灣大師年忌法要	道端良秀「山西省署州及び高平の石窟調査」 （『大谷学報』第 24 卷第 4 号、昭和 18 年 8 月）
昭和 17 年 10 月 10 日	日本側導師は常盤大定（大谷派代表）、中国側導師は妙香師（卦山天寶寺住持） 日本側導師は常盤大定、中國側導師は妙香師 参列は小笠原宣秀、道端良秀、津村雅量、高澤量京、齋藤典察のほか、日中僧俗が参加	道端良秀「山西省署州及び高平の石窟調査」 （『大谷学報』第 24 卷第 4 号、昭和 18 年 8 月）
昭和 17 年 10 月 6 日	常盤大定の講話、交城県知事の招待要あり 10 月 7 日 石壁玄中寺にて日華戦死殉難者慰靈法会・石壁玄中寺奉讚・臺灣大師千四百年 還忌大法会	道端良秀「山西省署州及び高平の石窟調査」 （『大谷学報』第 24 卷第 4 号、昭和 18 年 8 月）
昭和 17 年 10 月 8 日	日本側導師は常盤大定、副導師は菅原惠慶（大谷派布教師） 中国側導師は根正定（玄中寺住持）	道端良秀「山西省署州及び高平の石窟調査」 （『大谷学報』第 24 卷第 4 号、昭和 18 年 8 月）
昭和 17 年 10 月 9 日	日本側參勤者は津村、齋藤、小笠原、高津のほか、現地各派布教師所主任ら約 20 名 来賓は野口少尉、金森（新民公）、孫県知事代理、交城県警備隊王少尉ら 一行は警備隊に護られながら玄中寺参詣したといふ	道端良秀「山西省署州及び高平の石窟調査」 （『大谷学報』第 24 卷第 4 号、昭和 18 年 8 月）
昭和 17 年 10 月 10 日	10 月 8 日～10 日 太原市新民教育館にて「山西省仏廟紹介展覽会」を開催する 出講は菅原、小笠原、道端、深奥、五十九師（大谷派特派布教師）、原田晶堂（日蓮宗） 10 月 10 日 最後に「臺灣大師褒讚」を中國僧一同で唱和したといふ 奉讃会より、記念品として給葉書が発行される 知院院で臺灣忌法要が行われ、望月信亭・塙木善隆の講演が行われる 導師は都芳彌円智長、来賓は望月信亭（黒谷法主）、林彦明（勵學）	道端良秀「山西省署州及び高平の石窟調査」 （『大谷学報』第 24 卷第 4 号、昭和 18 年 8 月）
昭和 17 年 10 月 13 日 ～ 12 月	小笠原宣秀が太原から臨汾、運城、蒲州へ仏教史跡踏査に向かう 同行者は道端良秀	道端良秀「山西省署州及び高平の石窟調査」 （『大谷学報』第 24 卷第 4 号、昭和 18 年 8 月）
昭和 18 年 2 月	龍谷大学東亜学会が誕生する 3 月 16 日の第 2 回例会で、小笠原宣秀が獲鹿本願寺について発表する	『中外日報』第 12934 号（昭和 17 年 10 月 2 日） 『中外日報』第 12939 号（昭和 17 年 10 月 8 日） 『支那仏教史学』第 7 卷第 1 号「學界集報」（昭和 18 年 6 月）
昭和 18 年 3 月	菅原惠慶が「石壁玄中寺多語記」を刊行する	『中外日報』第 13056 号（昭和 18 年 3 月 4 日）
昭和 18 年 4 月	小笠原宣秀「唐代創建の獲鹿本願寺」が『支那仏教史学』第 6 卷第 3 号に掲載される	『支那仏教史学』第 6 卷第 3 号（昭和 18 年 4 月発行）
昭和 18 年 5 月 1 日	支那仏教史学大会（第 3 回）が開催される 支那仏教史学大会において道端良秀新將來の玄中寺拓本の展観が行われる	『支那仏教史学』第 7 卷第 1 号「學界集報」（昭和 18 年 6 月） 『支那仏教史学』第 7 卷第 2 号「學界集報」（昭和 18 年 8 月）

昭和 18 年 5 月 2 日	常盤大定が 1 ヶ月をかけて、上野修躰の同行で、中国各地を旅行する。金山を経由して、9 日に開封駅に到着する	常盤大定「成尋法師の建碑式典と玄奘三蔵の遺骨発現（上・下）」 〔「西論理会論譲演集」第 490 号・491 号、昭和 18 年〕 〔上野修躰「日華の文化交流（一・二・三・四・五・六）」 〔『中外日報』第 13141 号～第 13146 号、昭和 18 年 6 月 15 日～20 H〕
昭和 18 年 5 月 10 日	常盤大定が南京国民政府（汪兆銘政府）の河南省長であった田文炳と面会する	
昭和 18 年 5 月 12 日	開封で成尋禪の陰幕式法要が盛大に挙行される。日中の僧侶約 20 人を從えて法要を行つ 導師は常盤大定、副導師は鉄塔寺住持の寂通西と三好顯隆	
昭和 18 年 5 月 14 日	常盤大定は南京に到着後、植民諸外交部長の官邸を訪問する	
昭和 18 年 5 月 15 日	常盤大定は国民党主席の汪兆銘との会談が実現する	
昭和 18 年 5 月 17 日	常盤大定が文物保存所で玄奘三蔵の遺骨を拝する	
昭和 18 年 6 月	龜鳴寺において有民説が主催する午餐会に招かれる 翌 2 月、日本軍が土木工事中に発見した石棺側面の文字より遺骨が玄奘と確認される 翌 2 月、日本軍から汪兆銘政権に遺骨が移管され、玄奘塔の再建が請け渡される 常盤大定は玄奘の遺骨が発見された大觀音寺に立寄り、ついで明孝陵と中山陵を見学する 常盤大定が国立中央大学で「玄奘三蔵と唐代の文化精神」と題する講演を行う	常盤大定が国立中央大学で「玄奘三蔵と唐代の文化精神」を講演する 道端良秀が「玄中寺復興問題」について報告する 昭和 16 年 7 月より 1 年半の中国留学を希望し、北支を中心調査に従事したという 北京市では済南本願寺を基地として、各地の本願寺を安息所とする 山西省では太原本願寺を中心して 5 ヶ月間、軍属として文化史跡調査に従事する
昭和 19 年 3 月	小笠原宣秀が『龍谷学報』に「山西省蒲州踏査の記」を掲載する	
昭和 19 年 5 月 18 日 ～ 5 月 19 日	晉原惠慶「玄中寺の墓」が『中外日報』に掲載される	道端良秀「支那仏教調査報告概要」（『莫宗』第 502 号、昭和 18 年 6 月）
昭和 19 年 5 月 20 日	玄中寺の墓遷法要がコラのため 5 月 23 日に延期される 臺鸞法要事務所は昭和 17 年以後、毎年厳修される 法要事務所は太原本願寺に置かれ、下川直秀、藤谷道誠が委員として準備を進める	小笠原宣秀「山西省蒲州踏査の記」（『龍谷学報』第 335 号、昭和 19 年 3 月）
昭和 19 年 12 月 26 日	浅運寺は墓を移植した晋原惠慶の寺である 有民説と蔡大使が来朝中で「褒寺」の揮毫を贈って日中親善を結んだといふ 列席者は他に、常盤大定、横山大觀（羅の絵を揮毫）、安藤浅草本願寺輪番 晋原惠慶が大師奉賀会の設立が計画される予定だという	『中外日報』第 13418 号・第 13419 号（昭和 19 年 5 月 18 日・19 H）
昭和 20 年 3 月		『中外日報』第 13420 号（昭和 19 年 5 月 20 日）
昭和 20 年 5 月 5 日		『中外日報』第 13582 号（昭和 19 年 12 月 27 日）
昭和 20 年 7 月	晋原惠慶の常盤大定追悼文が『中外日報』に掲載される	『中外日報』第 13632 号（昭和 20 年 3 月 9 日）
昭和 21 年 10 月	道端良秀が『大谷学報』に「金石資料による石壁玄中寺の研究」を掲載する	※ 晋原惠慶「常盤博士を偲ぶ（上・中・下）」 〔『中外日報』第 13708 号・第 13709 号・第 13710 号、昭和 20 年 7 月 10 日・11 日・13 日〕 道端良秀「金石資料による石壁玄中寺の研究」 〔『大谷学報』第 26 卷第 1・2 合併号、昭和 21 年 10 月〕

注記：※は渡辺健哉「東北大学附属図書館蔵 玄奘三蔵求法像」をめぐって—常盤大定と汪兆銘政府をつなぐ一幅—（『集刊東洋学』第 112 号、平成 27 年 1 月）を参照した

小川貫式所蔵拓本初探——附「小川貫式所蔵拓本目録（除 龍門部分）」——

北村一仁

はじめに

小川貫式逝去の後、氏が所蔵する書籍・資料は、龍谷大学の小田義久氏（当時、教授）に託され、小田氏を代表とする「小川貫式先生蔵貴重書研究会」によって、整理および調査研究が行われた。その成果はDV

D二枚組である『西巣寺藏橘資料・古写経断簡集成・小川貫式先生著作集』としてまとめられ、二〇〇八年に頒布された。その調査研究の状況及び概要については、猪飼祥夫「小川貫式先生の残された貴重書概観」および大木彰・橋堂晃一・吉田豊「大谷探検隊収集『西巣寺藏橘資料』について」（共に『東洋史苑』七〇・七一 二〇〇八）、そして本誌前号掲載の中川剛「新出の西巣寺蔵『小川貫式資料』について」に詳述されるところである。

小川が収集した資料のうち拓本については、猪飼氏によれば、少なからぬ部分が太平洋戦争中に失われたという。そのなかで被災を免れ現在まで残った拓本については、猪飼氏らの手により基礎的な整理がなされたうえで、龍谷大学の佐藤智水氏（当時、教授。現在、同大世界仏教文化研究センター・研究フェロー）に委ねられることとなつた。

佐藤氏に託された小川収集の拓本は、装丁された龍門石窟のものと、未装丁のそれ以外のものとに大別することができる。この両種の拓本は共に、佐藤氏を中心とするグループによって丹念な整理と調査が行われ、そのうちまず前者、龍門石窟に関するものについて、目録が作成された。この目録及び解説は、龍谷大学東洋史学研究会発行の『東洋史苑』に掲載が予定されている。詳細に関してはそちらに委ねることとするが、ここでは行論の都合上、概要のみを簡単に述べておきたい。

小川藏の龍門拓本は、一一五三篇の拓本が、全十二冊の冊子『初拓龍門一千種』としてまとめられている。猪飼氏が前掲報告にて述べるよう に、その全てが初拓かどうかは不明であり、加えて重複して収められて いる拓本もある。ただ佐藤氏が、龍門石窟にある題記をまとめた『龍門 石窟碑刻題記彙録』(劉景龍等編、中国大百科全書出版社 一九九八) 等と比較しつつ行った考察によれば、稀見のものや、それらの図録・資 料集に掲載される拓本よりも状態の良いものが多く見られるほか、録文 等の記載を修正し得る拓本も、少なからず見られるという。今後、龍門 石窟の銘文を詳細に分析していく上で、非常に貴重な資料となることが 期待できる拓本であるといえよう。

一方龍門以外の拓本については、佐藤氏が著者を含む若手研究者及び 院生を指導しながら整理を加え、その後著者が一つ一つ確認し、目録を作成した。それが本稿末に付した表「小川貫式所蔵拓本目録（除 龍門 部分）」である。本稿ではこの整理に基づきつつ、主としてこれらの拓 本の概要を述べたあと、初步的な考察を試みたい。

入れられ整理された状態にあった。本稿の目録では、この封筒一通を一 つの単位として整理した。多くが封筒毎に各々一枚、あるいは碑陽・碑 隅というような一揃いの拓本が納められていたが、中には複数の異なる 拓本が一つの封筒に納められているものもあった。

拓本は大部分が中国のものである。中国以外のものとしては、日本の ものが三種、そしてエジプトのものと見られるヒエログリフの拓本一種 も収められている。その他、拓本ではないものが三種ある。

中国のものについて時代ごとにまとめると、北朝のものが三、隋唐 (武周含む) のものが一八、十国・宋金元のものが四一、明以降のもの が七、時代が明らかでないものが二三ある。

一 「小川貫式所蔵拓本目録（除 龍門部分）」の 概要と特徴

本コレクションの拓本は、全て裏打ちも軸装もされていないものであ る。著者が確認した段階において、それらの拓本は全部で九九の封筒に

地域別に見てみると、まず西安碑林を中心とする陝西省西安市のもの が二〇を数える。特徴として、その大半が唐代のものであるということ が挙げられる。これらの拓本の入手時期は不明であるが、その大部分は まとめて購入された可能性が高い。手がかりとなるものとして、5「大 唐三藏聖教之序」拓本が整理されていた袋に、一九八一年一〇月一九日、 西安において百元で購入したと見られる領収書が添付されていたほか、 いくつかの拓本には、西安碑林で販売されているものに用いられている もの、あるいはそれによく似た題簽や封筒が附されていた（後掲挿図5）。

次いで江蘇省南京市、棲霞山のものが二一、これもまた大半が宋代の ものである点が特徴的である。なかでも千仏巖のもの（次頁挿図1）に ついては、その全てが供養者の名を中心とした銘文の一部のみの拓本で

あり、また状態も良くないものが
多い。ただ、小川の手による題簽

が全てに附されており、氏がこの

拓本を、あるいは千仏巖の摩崖記

を重要視していたことが読み取れ

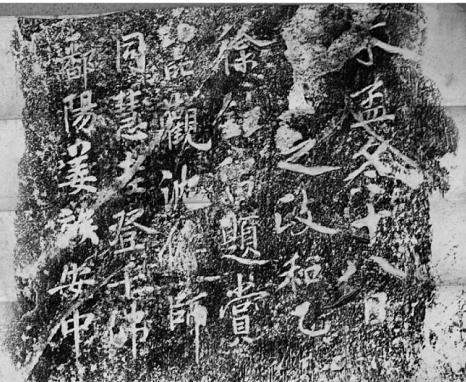
る。中川前掲報告によれば、氏は

昭和一四（一九三九）年に南京仏

学院で教鞭を執っていたことが記

されている。さらに『棲霞山史蹟』

（南京青年叢書1 南京青年会



插図1 「棲霞山千仏巖摩崖記」
1、40 「鄱陽姜族造像記」

を重要視していたことが読み取れる。中川前掲報告によれば、氏は昭和一四（一九三九）年に南京仏学院で教鞭を執っていたことが記されている。さらに『棲霞山史蹟』（南京青年叢書1 南京青年会）一九四〇）もこの時期に著されている。他の揚州・鎮江・蘇州など江南のものと共に、当時収集したものと考えるのが妥当であろう。

その一つ、333～36「歿故僧正慧悟大師功德之幢」に關しては、実際に採拓している様子を撮影した写真が現存しており（西嚴寺小川徳水所蔵、挿図⁽¹⁾）、同拓本はこの時に採られたものであるとみられる。

ほかの拓本も、この時に採られたと考えるべきであろう。本コレクショ

插図2 「慧悟大師功德之幢」採拓の様子：右=小川、左=アルバムのメモによれば岩上先天（大映）。



ンには、同じ五台山のものとされる29「歿故僧正覺證大師功德之幢」・30「歿故僧省琴功德之幢」・32「尊勝王功德之幢」・51「故廣慧大師功德之幢」・52「善才預修功德之幢」・53「尊勝邑衆功德之幢」・

59 「故恩公唯識鈔主功德之幢」がある。

それらの拓本を見てみると、その紙質についていえば、厚手のごわごわしたものと、それより少し薄くややなめらかなものとがあり、少なくとも同じ種類の紙に採られたものではない。このことに鑑みれば、当然別々の時期・機会に採られた拓本という可能性も否定はできないが、現在でも交通がいささか不便な五台山に、さらに交通事情が悪い時代に、何度も足を運んだとは考えにくい。また業者から仕入れたという可能性についても考えると、業者が採拓したものとしては、採られているのがほぼ題記のみなど、不備の点が目立つ。

すなわちこれらの拓本は、小川が五台山を訪れた際に、自らの手で採拓したもの、さらに言えば恐らくいくつかのグループに分かれてそれぞれで紙を準備し、それに採ったものと見るべきであろう。複数の種類の紙がみられるのはそのためではなかろうか。実際、この時の調査には酒井眞典・菊地宣正らも参加している⁽²⁾。両氏の協力の下、手分けして作業したのであろう。採られた時期を断定するにはさらなる調査が必要ではあるが、現段階において私は概ねこの五台山調査時に共に採られたものと考える。前述の如く、残念ながらこれらの拓本は、その多くが題額と銘文の一部のみのものである。とはいえそれでも現在容易に目にできる拓本が少なく、その意味では貴重なものであるといえる。

このような五台山関連の拓本の中で、注意を必要とするのは、62の不明拓本である。この封筒には3枚の拓本があり、一通の石碑の上部左

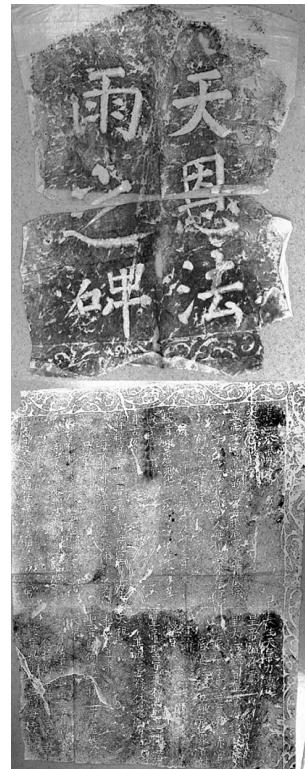
右とその下部（但し碑の途中まで）と見られるものである。内容については、「長生天氣力裏：」「天地氣力裏」という文言で始まつており、「成吉思（チンギス）皇帝」「薛禪皇帝（＝フビライ）」などの人名も見られることから、モンゴル元朝のもの、いくつかの詔を一つの石碑に刻んだものと見て間違いない。紀年は不明であるが「狗兒年春二月二十日」「狗兒年二月二十九日」「牛兒年四月二十」などと記されている。⁽³⁾

また場所については、「五臺山」「壽寧寺」の文字があることから、五台山の壽寧寺にあつたものと推定される。同寺には元代の「天恩法雨之碑」があるとされ、高明和「五台山石碑」（『五台山研究』20-14-1）によれば、不明拓本はこの碑の可能性がある。そこで近年刊行された五台山諸寺に現存する碑の拓本や情報を集め、五台山仏教協会編『五台山碑文』（山西人民出版社 一二〇一六）を見てみると、果たしてこの拓片は「天恩法雨之碑」碑陽のものであることが確認できた⁽⁴⁾。なお題額部分に関しては別に拓本がある（61、本文部分（62）共に挿図3）。

このほかに山西省のものとしては、大同市の下華嚴寺のものも見られる（54・55、57・58）。小川の「大同佛教史跡見学記」手稿によれば、昭和一六年七月二八日に下華嚴寺を訪れている。この際に得たものである可能性が高い。

また紀年および場所について詳細不明ながら、陀羅尼經幢と思われる拓本が複数見られる（81～83・93）。氏の前掲「五台山金石碑目」手稿や、同じく前掲『五台山碑文』によれば、多くの經幢が確認できる。

挿図3 「天恩法雨之碑」拓本（6-1および6-2右上部分の拓）



挿図4 2-3 仏教・道教經典拓本
(上三段が『仏説摩利支天經』、下二段が『黃帝陰符經』)



ただ現段階では、各々の拓本がどこのものかを断定することは困難である。後考を俟ちたい。

そして仏教だけではなく、一部道教經典の碑も見られる。特に2-3、「仏説摩利支天經」と「黃帝陰符經」が並び刻まれている石碑の拓本（挿図4）は興味深い。この碑の由来や二經の繋がりに關しては別に検討が必要であろうが、ここでは、仏教と道教の經典が一碑に刻まれていることのみを強調しておきたい。⁽⁵⁾小川は、仏教經典に対し道教經典が齎した影響、あるいは仏道相互の交流・関係についても関心を抱いていたのであろうか。

以上の整理に基づき、大まかな特徴を挙げると、まず時代としては唐宋代のものが多いということが挙げられる。そして地域的には、唐代のものは陝西西安碑林所蔵のものが大半を占め、宋代のものは江南（特に南京棲霞山）および山西（特に五台山）のものが多い。前述の如く多く

多くの拓本は失われてしまつたため、断定的なことは言えないものの、この偏りは恐らくそのまま小川の研究の重心、あるいは興味関心を反映したものであるといえよう。とすれば、この点について分析を加えることにより、氏が何に重点を置いて資料を収集し、研究を深めていこうとしたのかということを窺う手がかりともなり得よう。そこで次にこの点について考察していくことにする。

二 「小川貫式所蔵拓本目録（除 龍門部分）」に 関する初步的考察

以上の整理に基づき、再度内容について見てみると、当然の如く僧侶の墓銘および顕彰碑記・造像銘・寺院や仏像の重修記・刻経など、仏教関係の石刻が大半を占めていることが確認できる。なかでも特に棲霞山・五台山のものがまとまつた形で見られる。小川とこの二箇所との関わりについて見てみると、まず棲霞山については氏自身が前掲『棲霞山史蹟』を著している。また五台山との関係については、本誌前号掲載、藤井由紀子「五台山六月大会の復興と日中戦争—『小川貫式資料』にみる五台山」に詳しいので、そちらに委ねたい。小川はこれら両地の仏教に対し、共にまとまった考察を行つており、その強い関心を読み取ることができ。そして本コレクションにおける拓本の数も、このことを裏付けていといえよう。

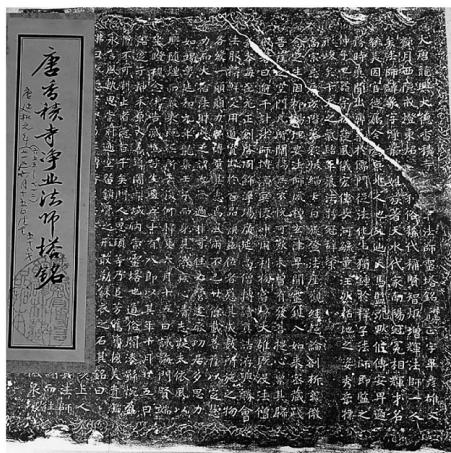
これららの特徴以外に目立つ点として、善導関連の拓本が複数見られるという点が挙げられる。この点に関して少し見ていくことにしたい。

1 善導と『無量寿經』

先学の研究によると、本コレクションの拓本のうち、1-1 「大唐龍興大德香積寺淨業法師靈塔銘」（挿図5）・1-2 「大唐實際寺故寺主懷惲奉勅贈隆闡大法師碑銘 幷序」は、善導に関する銘文であるという。⁽⁶⁾ 言う

までもなく善導は、浄土真宗において重要な立場に位置づけられており、わが国の浄土真宗においては七高僧の第五祖とされ、浄土宗においても、法然による「淨土五祖」のうちの第三祖に数えられている。浄土真宗本願寺派の僧侶である小川が、善導について深い関心を抱いていたことは、極めて自然である。北京房山の1-4 「無量寿觀經碑」 拓本に付された封筒のメモにも、「この経碑建立は唐長安光明寺善導大師（一六八一）在世中のことである」と、立碑が善導大師在世中であることが特記されている。ここにも氏の善導に対する関心が窺える。

挿図5 1-1 「大唐龍興大德香積寺淨業法師靈塔銘」 拓本並びに題簽（下部に「陝西省博物館碑林藏品拓本」印がある）



このメモと直接関係するか否かは不明ながら、小川はその論考「唐鈔無量寿觀經續述」（『佛教史學』一—三 一九五〇^⑦）において、龍谷大学図書館所蔵の「無量寿觀經續述」の由来からその内容に至るまで、詳細な考察を行っている。その中で善導の「觀經疏文」との対比が行い、「續述」は、「上は道綽の安樂集文を受け、下は善導の觀經四帖疏をひき起す主役をつとめる重大な地位にある^⑧」と、仏教史における位置づけを述べている。

この「觀無量壽經」に関して小川は、本文及び注に挙げたもの以外にも、「觀阿彌陀經集註について」（『印度学仏教学研究』一七（九一））

一九六一）・「北魏の素經、無量壽經」（『石田充之博士古稀記念論文・淨土教の研究』、一九八二）という文章を撰している。なかでも『觀阿彌陀經集註』（氏によれば親鸞聖人真筆の国宝『觀無量壽經集註』・『阿彌陀經集註』各一巻を指す）に関する「觀阿彌陀經集註について」では、經典の名称を検討する際に房山石經の「無量壽觀經碑」が、論文中で実際に利用されている。

小川は夙に一九三一年の段階で「觀無量壽仏經」の拓本を入手しているが^⑨、その他の善導関連の拓本を入手した時期がわからぬため、「觀經」や善導に対するこれらの考察が行われた際に、上述の諸拓本を直接の判断材料にしたかという点について断言することはできない。ただ先のメモからは、氏が長年に亘り一貫して善導を強く意識しつつ研究に従事し、その過程で上述の拓本あるいは同經と向かい合っていた姿を想像

できる。その論考に鑑みても、小川が『無量壽經』『觀無量壽經』『阿彌陀經』等に対しても特に強い関心を持っていたことは疑いない。つまり、前述したいくつかの拓本は、氏が善導および「淨土教正依の經典」である上掲經典について、さらに深く追究するに際し、収集したものと考えるべきではなかろうか。以上のこととはあくまでも憶測であり、かつ筆者自身は仏教に関しては門外漢ゆえに多くのことを語れないが、仏教史学、特に淨土宗・淨土真宗研究史に小川を位置づける際、重要な資料群であると考える。

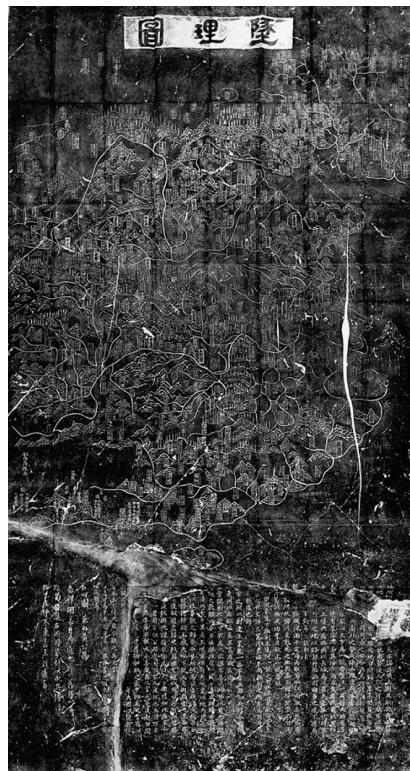
2 「墜理図」と江南地誌

一方、当コレクションに收められる拓本のうち、そのほとんどが仏教に関するものであるのに対し、60「墜理図」（挿図6）は、特に異質である。「墜理図」とは地理図のことであり、同拓もまた地図とその解説からなる碑のものである。

まずこの「墜理図」に関する情報を、少しまとめてみたい。まずこの碑は蘇州碑刻博物館（文廟）に、同館の「四大宋碑」の一として現存している。碑の法量は縦二二〇センチメートル×横一〇五センチメートル。インターネット上のオークションサイトなどによれば、近年においてもこの碑の拓本はいくらか流通しているようである。¹⁴ またわが国では京都大学人文科学研究所のほか、明治大学図書館等に所蔵されていることが確認できた。図録本などへの採録については、管見の及ぶ限りにおいて、

插図 6 60 「墜理図」拓本

祐丁未仲冬東嘉王致遠書



(書き下し)

右四圖、兼山黃公、嘉邸の翊善と為りし日、進¹⁷する所なり。(王)致遠、舊と此の本を蜀に得、右浙に司¹⁸するに、因りて摹刻し以て永えに其れ傳えん。淳祐丁未、仲冬。東嘉の王致遠、書す。

僅かに曹婉如主編『中国古代地図集(戰國—元)』(文物出版社 一九九〇)に収められている程度であり、その意味でも本拓は比較的貴重なものと考えられる。

それではこの「墜理図」とは、如何なる由来を持つ地図だったのであるか。このことについて、地図の左下に附されている跋文に、次のように記されている。

つまり、南宋の黃裳(兼山は号)が、「嘉邸」すなわち嘉王趙拏(のちの第四代皇帝寧宗)の下で「翊善」(教育係)であった時、獻上するため描いた図を、王致遠が四川で得て、「司¹⁸」(一般に按察使を指すが、錢正・姚世英氏前掲論文では「兩浙西路提点刑獄公事」という(四七頁))として赴任した際に蘇州にもたらし、南宋の淳祐七(一二四七)年丁未の年に、この跋文と共に石に刻んだものである。

では何故小川はこのような由来を持つ拓本を入手したのであろうか。

繰り返すがやはり異質である。そこで少し氏の研究を見てみると、氏には『宋元地誌目 書誌目録 寺院山誌目』という、宋元時代の江南地域に関する地方志および寺誌の目録(手稿)もあり、江南地方の地域史・地誌、あるいは歴史地理学に関する興味もあったようである。実際、高橋良政編『光山西嚴寺藏和古書目』によれば、小川が直接収集したものかどうかは不明であるが、実際に西嚴寺の蔵書として宋代以降の地方志

右四圖 兼山黃公為
嘉邸翊善〔日〕所進也致遠舊得此本
於蜀司¹⁹臬右浙因摹刻以永其傳淳

何故江南地方のものなのか。恐らくここには当然のことながら氏が南京仏学院にいたことが深く関係しているように思う。「墜理図」

は、その際に蘇州文廟に至り、収集したものではなかろうか。さらに言うならば、同文廟にある他の三碑の拓本も所蔵していたものの、戦時中に失われた可能性もある。むしろそう考える方が自然であろう。

小川は、布教弘法にあたっての基礎知識として、江南の地理・歴史・宗教・風俗などを学び、研究していたことは疑いない。西嚴寺に残る江南地域の地方志がそのことを物語っている。それに加え、氏には『棲霞山史蹟』を初めとする江南地域における仏教に関する論文がある。よつて南京棲霞山を中心として江南の仏教世界を総合的に把握するため、その根本史料として当地の地誌ならびに関係する石刻史料を、積極的に収集したのではなかろうか。「墜理図」の拓本もまたその一つであったようと考える。

むすびにかえて

以上、簡単ではあるが小川藏拓本コレクションの概要について紹介し、初步的な考察を加えてきた。筆者の力不足もあり、明らかにし得た部分はごく限られたものとなつたことは甚だ遺憾である。ただ今回作成した目録を再度眺めてみると、本コレクションは、これまでに整理された他の資料、特に佐藤智水氏の整理に係る龍門拓本と併せて、さらに検討を

加えることで、次のような問題を考察する手がかりになると考へるのではないかという感想を得た。

すなわち本コレクションは、南北朝・唐・宋・元など、各々の石刻史料に表される、古い時代の中国各地における仏教史上の問題を考察する材料になることは言うまでもない。それと同時に、小川貫式という一人の僧侶・研究者を通して、昭和初期の中国における（日本）仏教の状況、特に戦時中の日本仏教界の動向や、近代・現代の日中関係史など、仏教史のみにとどまらない広汎な問題を考察し得る可能性を秘めた材料であるともいえよう。否、むしろこの点こそが重要ではなかろうか。

このように考へると、小川貫式が収集したこれらの史資料群は、一つのコレクションとして非常に貴重なものであるといえる。是非とも個別の史料・資料として分散させてしまうのではなく、まとまった形で保存され、またできる限り研究者の利用に便利な体制にて、十分管理されることを、切に願う次第である。

註

(1) なお岩上先天（明治三七（一九〇四）生～昭和四四（一九六九）没）

については、孫の藤沢友得氏によるブログ

<http://www.fujisawa.tki.jp/blog.php?blogid=5&archive=2010-07>

参照。二〇一〇年七月に浜松市秋野不矩美術館で開催された「父娘三人展」で掲示されたプロフィールによれば、東京美術学校にて竹内栖鳳に学んだ後、「昭和十三年、東洋美術研究のため政府より北京大学の講師として派遣され、仏画などの研究と遺跡保護のため中国

各地を回る」とある。

(2)

藤井前掲論文、「〇七頁等。

(3)

松井節「大元ウルス命令文の書式」(『待兼山論叢』史学篇二九、一九九五) 参照。

(4)

ちなみに同書によれば、近い時代のもので似た内容を持つ碑幢として広化寺に「□梵大師塔銘」(宋宣和二、一一二〇)・「真容院主贊公預修功德塔記」(金大定二、一二六二)、七仏寺に「演秘大師行状実録」(宋大中祥符四、一〇一)・「明覺大師神道記」(宋熙寧二、一〇六九)などが現存しているという。本コレクションに以上の碑の拓本は見られないが、特に七仏寺のものについては、同寺にて採られた拓本が、ほかにもある。もともと拓本は得ていたが、戦時に失われたと見るべきか。

(5)

このうち「陰符經」に関しては研究の蓄積があるが、特に近年の研究としては、山田俊「宋代に於ける『陰符經』の受容について」(『東方宗教』一二三、二〇一四) 参照。煉丹との関わりが深いといふ。ただ「摩利支天經」及び仏典との関わりについては触れられていない。因みに摩利支天は、斗母元君・斗姥元君として道教に取り入れられているとされるが(李耀輝「從斗姥与摩利支天的融合看仏道文化的交涉」『中国道教』一〇一、一四 参照)、黄帝及び「陰符經」、さらには煉丹などとどう関わつてくるのかについては、また改めて論ずるべき問題であろう。

(6)

常盤大定・閔野定「支那仏教史蹟」(仏教史蹟研究会一九二五)のほか、塚本善隆「金石文字に見えたる善導と道綽」(『仏教学』二、七一九、一九八〇)所収)、金子寛哉「唐隆闡大法師碑銘」試釈(原書房一九八〇)、岩井大慧「善導伝の一考察」(『日文仏教史論叢』(日中浄土)四、一九八二)・「淨業法師碑をめぐって」(同論集刊行会『淨土教論集』戸松教授古希記念)大東出版社一九八七)、稻岡誓純「淨業法師碑の研究」(『仏教学大学学院研究紀要』一八、一九九九)等参照。

(7)

「無量寿觀經續述解題」(『西域文化研究』一九五八 所収) 館法藏もある。

(8) 「唐鈔無量寿觀經續述」六六頁。

(9) 西嚴寺には、一九三一年一月二一日に、北平(今の北京)瑠璃廠の慶雲堂にて同拓本を購入した際の領收書が残っている。

(10) 「觀阿彌陀經集註について」一八九頁。

(11) ちなみに石刻史料に基づいた善導に関する最近の研究として、倉本尚徳「善導の著作と龍門阿彌陀造像記・『觀經疏』十四行偈石刻の新発見」(『印度學佛教學研究』六三、二〇一五)がある。倉本氏は、善導やその信奉者が龍門における阿彌陀造像や淨土造像に関与したことを指摘している。

(12) ほかの三碑は「平江図」「帝王紹運図」「天文図」。

(13) 同館サイト、<http://www.szdkmuseum.com/view.asp?rid=729> 参照(一〇一七・八・二七閲覧)。

(14) 試みに中國の古書販売・オーネンサイト「孔夫子拍賣網」(<http://www.kongfz.cn/>)で検索してみると、一一〇一三、一五年にかけて、四部取引されている(一〇一七・九・三〇検索)。

(15) <http://www.lib.meiji.ac.jp/about/exhibition/gallery/42/42.pdf/pamph.pdf> 一〇一七・九・一参照。

(16) 七〇頁。なお同書には錢止・姚世英による解説のほか、別に両氏による「墮理圖碑」という一文があり、碑の詳細が記されている。

(17) 『宋史』卷三九三の本伝によれば「太學博士に除せられ、祕書郎に進み、嘉王府翊善に遷る。……裳、久しう王邸に侍し、每歲、誕節に、則ち詩を陳べ以て寓諷す。初め嘗て渾天儀・輿地圖を製り、……王府春秋講義及び兼山集有り」とあり、「輿地圖」を作ったことが記されている。

小川貴之所蔵拓本目録（除 龍門部分）

番号	名称	王朝	元号年	西暦	月 日 (日曆)	場所	典拠・他の所蔵など	備考
1	仇臣生造像碑	北魏	正光5	524	0715	陕西省鶴川市、現在漢王山碑林	漢王山碑刻 I-22	碑陽文のみ
2	敬史君碑	東魏	興和2	540		河南省長葛市、現在市第十四中學	NAN0413	碑陰のみ
3	董洪達四十人等造像記	北齊	武平1	570	0126	山西省河曲縣登封市、少林寺	白晶 238	碑陰のみ、別称「馮曜質造像」
4	無量寿觀經 石第二	隋~唐?				北京市、房山西天靈居寺?		14 唐「無量寿觀經碑」封筒にもと混入していた小封筒は、この拓のものが、それによれば隋・靜光、房山西天靈居寺のものとする
5	大唐三藏聖教之序	唐	永徽4	653	1015	陝西省西安市、現在慈恩寺	TOU0184	褚遂良書、神の写真・西安市で購入した鏡収書を附す(1982/10/19 100元)
6	撰山棲霞寺明徵君碑	唐	上元3	676	0425	江蘇省南京市、現在棲霞寺	TOU0597	別紙にて額部分の拓も附す。『棲霞山史蹟』D8も参照
7	杜文強等造像記	周	天授2	691	0528		TOU0767	封筒は李叶菴造像記とする
8	張敏之墓誌銘	周	天授3	692	0106	湖北省襄陽市?	TOU0779	唐張敏之墓誌十種の一つか
9	比丘尼法師碑記	唐	景龍3	709	0510	陝西省西安市、現在西安碑林	TOU061_963	状態悪し
10	大唐僧師史台精舍碑記	唐	開元11	723		陝西省西安市、現在西安碑林	TOU1078	表編 75 聖彌雄文 題簽に「陝西省博物館碑林藏品拓本」印
11	大唐龍興大德香樹寺淨業法師墓塔銘	唐	開元12	724	0615	陝西省西安市、現在西安碑林	TOU1087	表編 86 懷禪撰 「碑林拓本」の封筒に保存
12	佛號并序	唐	天寶2	743	1211	陝西省西安市、現在西安碑林	TOU1236_237	2紙、2部
13	大唐西京千福寺多宝塔感應碑文	唐	天寶11	752		陝西省西安市、現在西安碑林	TOU1292	3紙、碑陽・碑陰・左側。詳細なメモ同封。碑主は紀王李慎
14	無量寿觀經碑	唐	上元1	760	01**	陝西省西安市、現在西安碑林	TOU1344	表編 75 聖彌雄文 題簽に「陝西省博物館碑林藏品拓本」印
15	景教流行中國碑頌 并序	唐	建中2	781	0107	陝西省西安市、現在西安碑林	TOU1406	楊承和撰、『全唐文』卷998
16	邠國公(葉子謙)功德銘 并序	唐	長慶2	822	1201	陝西省西安市	TOU1499	碑削の文様が、拓背に同様のものであることを記す小川氏メモあり
17	邠國公(葉子謙)功德碑 文様のみ	唐	長慶2	822	1201	陝西省西安市	TOU1569	碑陽のみ、「民国8年拓」の簽を附す
18	特賜寺和尚林地十四至記	唐	長慶3	823	0523	陝西省交城県、文中寺	TOU1569	碑陽のみ、上のものよりは近拓
19	大達法師玄秘塔碑	唐	會昌1	841	1218	陝西省西安市、現在西安碑林	TOU1569	柳公權書 何かの書籍の一部か、裏面は永泰公主墓拓本と解説
20	大達法師玄秘塔碑	唐	會昌1	841	1218	陝西省西安市、現在西安碑林	TOU1569	大小21紙
21	玄秘塔碑	南唐				江蘇省南京市、棲霞山		仏說摩利支天經(乾德6年10月15日)・黃帝陰符經(同年11月9日)・太上老君常清淨經(太平興國5年2月21日)・太上昇玄消災降命經(同年3月15日)・太上三天尊說先天得道經(同年3月21日)で1紙、前者に「京兆府國子監」とあり
22	南唐妙因寺塔住所題仏語							状態悪し
23	道教經典拓本(5経2紙)	宋	乾德6年 太平興國5年	968 980		陝西省西安市、現在西安碑林	SOU0011 SOU0018	仏說摩利支天經(乾德6年10月15日)・黃帝陰符經(同年11月9日)・太上老君常清淨經(太平興國5年2月21日)・太上昇玄消災降命經(同年3月15日)・太上三天尊說先天得道經(同年3月21日)で1紙、前者に「京兆府國子監」とあり
24	大宋新訖三藏聖教序	宋	端拱1	988		永興軍太壹山開和寺、今陝西省西安市	SOU0023	金・薄伽藏跋記であることを示す小川メモあるも、混入か
25	招慶禪院大弘頂陀羅尼幢記	宋	淳化1	990	1228	福建省泉州府、招慶寺		李玉昆「仏頂陀羅尼經跋記及其史料彙覽」(「仏學研究」2000参照)
26	勸摶經文 并序	宋	天聖6	1028		陝西省西安市、現在西安碑林	SOU0049	見廻横、碑陰には「憲刑殿」を刻す。本拓は碑陽のみ
27	沈述師造像記	宋	熙寧7	1074	0928	江蘇省南京市、棲霞山千仏巖		2紙、2部、1部に題簽あり。「棲霞山千佛巖拓本二十七枚」と記された封筒を附す
28	蘭亭序	宋	熙寧9	1076		山西省五台縣、五台山七仏寺		題簽と銘文の一部のみ、題簽と銘文が裏面に印刷された封筒を附す
29	沒故僧大師功德之幢	宋	豐祐3	1083		山西省五台縣、五台山七仏寺		題簽と銘文の一部のみ、五台山では普壽寺にありとす
30	沒故僧省功功德之幢	宋	元祐6	1083	0811	山西省五台縣、五台山七仏寺		題簽と銘文の一部のみ、五台山では普壽寺にありとす
31	不明拓本	宋	元祐3	1088				國家為「祈求雨雪」
32	尊勝王功德之幢	宋	元祐3?	1088?		山西省五台縣、五台山七仏寺		題簽と銘文の一部のみ
33	沒故僧正慧悟大師功德之幢	宋	崇寧2	1103	0506	山西省五台縣、五台山菩薩頂裏三泉寺	SOU0230	銘文の一部のみ、もとは「懶銘」と題され整理される
34	沒故僧正慧悟大師功德之幢	宋	崇寧2	1103	0506	山西省五台縣、五台山菩薩頂裏三泉寺	SOU0230	銘文の一部のみ
35	慧悟大師墓塔銘	宋	崇寧2	1103	0506	山西省五台縣、五台山菩薩頂裏三泉寺	SOU0230	2紙、各々銘文の一部のみ
36	沒故僧正慧悟大師功德之幢	宋	崇寧2	1103	0506	山西省五台縣、五台山菩薩頂裏三泉寺	SOU0230	銘文の一部のみ、もとは「隧道銘」と題され整理される

37 管邦惠造像記	宋 宣和1 1111	江蘇省南京市，棲霞山千仏巖	題簽を附す，銘文の一部か
38 邵轉造像記	宋 宣和1 1111	江蘇省南京市，棲霞山千仏巖	題簽を附す，銘文の一部か
39 徐君臨造像記	宋 政和5 1115	江蘇省南京市，棲霞山千仏巖	題簽を附す，銘文の一部か
40 鄭陽姜氏造像記	宋 政和5 1115	江蘇省南京市，棲霞山千仏巖	2紙，2部，1部には題簽を附す，銘文の一部か
41 南目徐釋造像記	宋 政和7 1117	江蘇省南京市，棲霞山千仏巖	題簽を附す，銘文の一部か
42 楊述夫造像記	宋 政和7 1117	江蘇省南京市，棲霞山千仏巖	題簽を附す，銘文の一部か
43 余彥遠造像記	宋 政和8 1118	江蘇省南京市，棲霞山千仏巖	題簽を附す，銘文の一部か
44 尹像記	宋 政和8 1118	江蘇省南京市，棲霞山千仏巖	題簽を附す，銘文の一部か
45 項德翰造像記	宋 政和8 1118	江蘇省南京市，棲霞山千仏巖	題簽を附す，銘文の一部か
46 無碍叟造像記	宋 重和2 1119	江蘇省南京市，棲霞山千仏巖	題簽を附す，銘文の一部か
47 廉特造像記	宋 重和2 1119	江蘇省南京市，棲霞山千仏巖	題簽を附す，銘文の一部か
48 王賜造像記	宋 宣和10 1120	江蘇省南京市，棲霞山千仏巖	題簽を附す，銘文の一部か
49 唐大明興慶兩宮因殘石	宋 宋？	陝西省西安市	題簽には「鄧江撰」とあり。銘文の一部か
50 嚴仲荀抄	高僧傳云序	陝西省西安市？	題簽を附す，銘文の2枚を附す。折の裏に「宋」と記す
51 故法慧大師弘忍之贊	宋？	山西省五台縣，五台山七佛寺新廟裏	題簽と銘文の一部のみ
52 善才預修功德之贊	宋	山西省五台縣，五台山七仏寺南	ほぼ題簽のみ
53 尊勝邑坐功德之贊	金 正隆2 1157	山西省五台縣，五台山佛像寺	題簽を附す，銘文の一部か
54 大金國西京大慈義寺重修迦藍教記（陽）	金 大定2 1162	山西省大同市，華嚴寺	別紙に張棚一の跋文を附す
55 大金國西京大慈義寺重修迦藍教記（陰）	金 大定2 1162	山西省大同市，華嚴寺	2紙，碑拓本の写真2枚を附す。折の裏に「宋」と記す
56 金尚書禮部薦福禪院牒	金 大定10 1173	河南省開封市？	題簽と銘文の一部のみ
57 大金西京大普恩寺重修大殿記①	金 大定16 1176	山西省大同市，華嚴寺	五台山金石碑目3
58 大金西京大普恩寺重修大殿記②	金 大定16 1176	山西省大同市，華嚴寺	五台山金石碑目4
59 故恩公嘗識妙主功德之贊	金 泰和2 1202	山西省五台縣，五台山菩薩頂	SOU0638, 山右 20
60 標理圖	南宋 淳祐12 1247	江蘇省蘇州市，現在蘇州文廟（碑刻即物篇）	3紙に分類
61 天恩法雨之碑	元 大德10 1306	江蘇省五台縣，五台山寺觀音寺	SOU052B
62 不明拓本：天恩去雨之碑	元 大德10 1306	山西省五台縣，五台山寺尊寧寺	五台山金石碑目5
63 梵鏡寺補塑弘願記	明 1570 03**	江蘇省南京市，棲霞寺	五台山金石碑目5
64 梵霞寺重脩石碑記	明 1600 02**	江蘇省南京市，棲霞寺	五台山金石碑目4
65 揚州經藏院流通經典記・同院緣起及常住清	清 光緒26 1900	江蘇省揚州市	3紙、碑陽のみ。年代は碑陰による
66 香燈僧繪記	清 光緒27 1901	江蘇省揚州市	題簽のみ（2紙）
67 蘆真和尚碑	民国 民國11 1922	江蘇省揚州市，大明寺	常熟大定撰文（大正11）
68 小碑林記	民国 民國18 1929	陝西省西安市，現在西安碑林	毛小傑撰，68陝西新城小碑林記の碑陽
69 陝西新陵山碑林記	民国 民國18 1929	陝西省西安市，現在西安碑林	宋聯金撰，67小碑林記の碑陰
70 重新棲霞山巨像記	民国 民國20 1931	江蘇省南京市，棲霞寺	題簽を附す，銘文の一部か
71 莫伯遠造像記	丁酉 02**	江蘇省南京市，棲霞山千仏巖	常熟大定撰文（大正11）
72 彌彥造像記	江蘇省南京市，棲霞山千仏巖	江蘇省南京市，棲霞山千仏巖	毛小傑撰，68陝西新城小碑林記の碑陽
73 顏魯公与郭卿舍書		陝西省西安市，現在西安碑林	宋聯金撰，67小碑林記の碑陰
74 黃江北固山丹霞寺鑒拓本		江蘇省鎮江市，北固山丹霞寺	大田氏による手拓
75 女真士題名碑（女真文字）		河南省開封市	「在開封」というメモ書きあり
76 金剛般若波羅蜜經			10紙
77 法華經 卷2			第8紙中ほどより、般若心経
78 淨土證心集			
79 仁宗阿彌陀經 卷一 終章 呪			
80 妙法蓮華經 卷一			
81 仏頂尊勝陀羅尼經（8紙）			

82	陀羅尼 (6 紙)									
83	陀羅尼 (8 紙)									
84	大無塔四方入口開石縫刻仏画					陝西省西安市?				
85	不明 (補?)					題は小川メモ書きによる				
86	不明 (文様等)					大小 2 紙、ともに文字あり、大紙は経幡と類似、「幡」字下半もあり				
87	不明 (文様)					大 2 紙 (うち 1 紙は仏画) • 小 2 紙				
88	不明 (文様)					5 紙				
89	文様のみ					2 紙				
90	文様のみ					2 紙				
91	仏印画					6 紙				
92	仏縫画および陀羅尼 (4 紙)					IL 線画は金陵刻経廬のもの				
93	鐵鎗	日本	建保 5	1217	日本	江蘇省南京市?				
94	襄陽石刻阿弥陀経碑拓本	日本	正徳 4	1509	日本福岡宗像神社 or 京都知恩寺	影印、6 紙。4 で示した小封筒左下に、「襄陽石経碑拓部分/京都百萬遍知恩寺/境内にあり」というメモあり。本拓と関連するか?碑については景山春樹「宗像と京の阿弥陀経石」(『史述と美術』378 参照)				
95	源三位賴政御遺跡之碑	日本			日本京都府、平等院	1967 参照				
96	ヒエログラフ拓本				エジプト?	宮脇政恒・梁天清剛書				
97	江南報恩寺塔碑拓本				江蘇省南京市					
98	海龍王寺尼別受指図模写 (油印)									
99	□□極楽世界□□莊嚴之図 (線画)									

附：西敵寺現存拓本

西1	於遷等八人造像記	北魏	神龜 1	518	0615	NAN0180 「杜遷廿三人造釋迦像記」(龍門古陽洞窟南壁)と同年月日、供養者名も數名重複あり			
西2	魏曹聖情造像記	北魏	正光 6	525	0320	旧在山東臨淄、現在米国ベンシルヴァニア アーバンズ博物館	NAN0271、金申 048	四拓 (四面) — 紙	
西3	隋鄧州大興國寺舍利塔下銘	隋	仁寿 2	602	0408	河南省鄭州市			
西4	不明 (供養者像)								
西5	觀無量寿法經								

(凡例)

配列は年代の早い順である。その後、基本的に年代不明のもの、中国以外のもの、拓本ではないものという順で配列した。
それぞれの名のまとまりについては、筆者の所に渡ってきた時点で、同一の封筒に入っていたものを一つとして番号を振った。

備考欄について、特に撰者は網羅的な情報ではない。その他、表作成時に気づいたことを記した。

(典拠・略号)
冒頭ローマ字ものは「京都大学人文科学研究所所蔵 石刻拓本資料」(<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/imgsrv/takuhon/>) の整理番号である。その他は、
襄王山碑刻: 陕西省考古研究院等編『陝西襄王山碑刻芸術叢集』上海辞書出版社、2014
百品・頌韻英『北朝佛教石刻拓片百品』中央研究院歴史語言研究所、2008
江蘇通志稿: 編名『江蘇通志稿』

閻中金石略: 清 陳燦仁「閻中金石略」
五台山金石碑目: 小川貢一「五台山金石碑目」

五台山: 五台山佛教協会編『五台山碑文』山西人民出版社、2016
表編: 清 王昶『金石萃編』

山右: 清 胡鴉之『山右石刻叢編』
数字においては、巻数があるものは巻数、ないものはページ数、襄王山碑刻のみ、ローマ数字が巻数、アラビア数字がページ数を示す。